# 転生先はアニメ遊戯王みたいな平行世界

火壁

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

異世界転生をするとは思わなかった男がデュエルが生活に根付いている平行世界に転生してデュエルを満喫するお話。

# 目次


まさか俺自身に転生するとは ―― 1
最初は全力でいかないと力量を量れない ―― 10
強いのは強いなりに理由があったりする ―― 27
本気のデュエルは当分先 ―― 39
それは最早兄弟喧嘩ですらない ―― 48
決別する為のデュエル ―― 60
祭りは出会いの場？ ―― 77
そんな展開聞いて無いけど取り敢えずヨシ！ ―― 87
強いヤツが俺を待っている！……はずじゃないのか!? ―― 98
兄は下の者を舐めがち ―― 117
新生活と新しい約束 ―― 136

# まさか俺自身に転生するとは

異世界転生

最早誰に聞いても正確な答えが得られるだろうそのジャンル。俺も読んでいたがまさか自分が転生するとは思わなんだ。いや妄想じゃないよ?目の前に女神様いるし、でもなんか辛そうというか俺を見てない感じするのよね。

「睦月勝俊(むつきしょうと)さん。突然の出来事で混乱していると思います。しかし、あなたの人生は終わってしまったんです」

「あっはいでしょうね」

こんな真っ暗なのに相手をバッチリ見える不思議空間なんて夢か死後の世界以外ないだろ。女神様はポカンとしてるけど俺は死んだ実感がはっきりしてる。朝起きたら腕が痺れて全く動かせないのが全身にきてる感じだ。感覚器官が死んでる感じ。

「……驚かないのですね」

「まあ死んだ瞬間覚えてるし、それより助けた子って大丈夫でした?」

そう、俺が死んだ理由というのは人助けだ。転生物のテンプレトラックに轢かれるあ

れ。俺の場合は後輩の子が信号無視して走ったらコケた所にトラックが突っ込んできた。俺はその子を吹っ飛ばしてその代わりに…という何とも始末におえない馬鹿っぷりだったのだ。折角もう少しで新弾発売日だったのに自分を恨むぜ。

「あなたの助けた子は無事です。しかし、目の前で貴方が亡くなった瞬間を目撃した事で精神を病んでしまったようです」

「…もしかして俺のやった事って間違いだった?」

「そんな事はありません!貴方の行いは立派です。それを否定する事が出来る人なんているはずが…」

「でも精神病んじゃったんだよね。それを治療するのにかなりの期間が必要だろうし彼女やその両親が負担する金とか時間を考えると助けた事を責められそうだわ」

「そんな…そんな事……」

女神様は信じないといったように頭を振ってるけど、何か思い当たる節があるんだろうね。まあ教えてくれそうもないから触れないようにするしかないけど。

「それで、こんな感じに意識があるっていう事は?転生的なやつ?」

「っ…よくご存じですね。やはり人類の中でも有名なのですか?」

「日本以外でもそうかって聞かれたら分からないけど日本ではそうだね。いやー俺も異世界転生かーノッチが聞いたら羨ましがるだろうなー」

まあもう会えないんですけどね。そう考えるとちょっと寂しいな。なんだかんだ言って小学校からの付き合いだったしノッチくらしかもうデュエルしてくれなかったしな。

「確かに貴方には転生をしていただきます。しかし、他とは少し事情が違うんです」

「?それはどういう」

「それを知るにはこちらを見ていただいた方が早いと思います。こちらです」

女神様に付いて行くとそこには扉が一つあった。女神様が開けて俺に中に入るよう諭す。そこに入り中を見るとそこには

「……俺?」

俺がいた。しかし、今の俺じゃない。小学校

「彼の名は睦月勝俊。お察しの通り貴方自身です」

「えっと…なんでここに俺が?しかも小学生って」

「……それは」

女神様は俺が転生する事になった理由、そしてここにいる子供の俺について教えてくれた。要約すると

俺が転生する理由は子供の俺にある。

小学生の俺は平行世界の俺でデュエルモンスターズが生活に根付いている世界に生

まれたらしい。
そんな俺に対してデュエルを用いたいじめが多発。両親も遊んでいるだけだと取り合わなかった。
そんなある日抵抗した俺が気に入らなかったいじめっ子は俺のカードを全て奪おうと俺の家を強盗。その時殴られ蹴られ生死の境をさ迷っているけど死にはしないそうだ。
しかし子供の俺はそれに反発。また地獄に戻りたくないと死ぬ事を望んでいる。しかし肉体は息を吹き返しているから魂を入れないといけない。
そこに俺が死んで渡りに船といった具合に転生の話を持ちかけた。
因みに幼馴染も俺と同じでそいつもいじめに加担してた模様。
「下手くそなろう小説みたいだな」
「…しかし彼が生きる事を望まない以上私達は尊重しなければいけません。転生していただけませんか?」
「神様なんだから無理矢理でもいいんじゃないか?」
「そんな事許される訳ありません!あんな小さな子を…これ以上苦しませるような真似…!」
神様の在り方も変わったんかな。神話とかだと人間死ぬけどまあいいかと言わんば

かりに災害起こりまくるし人間とか遊び道具にしか考えていないって考えてたけどこんな優しい神様もいるのが意外だわ。

「まあそう言うならいいけどね。でもあっちの俺はどうなるんだ？」

「…輪廻の輪に還る事になります。記憶も消去され、新たな生命体となって再び生を受ける事になるでしょう」

「ならそいつの記憶俺に植え付ける事って出来る？」

「え？だ、大丈夫ですけど…よろしいのですか？」

「だって記憶が無いと何があったのかって分かんないだろ。いじめてきたやつらが俺と仲良かったやつかもしれないし」

俺が仲良かったやつらがあっちの俺とも仲がよかったとは限らない。俺自身いじめられた事もあるし死ぬ方が良いってなるのは余程酷いって事だろう。デュエルの世界でカード奪われるなんてデュエリスト生命潰されるようなものだし。

「っとその前に、あいつと話していいかな？」

「話す？いったい何を…」

「まあちょっとね」

女神様の不安を余所に俺は寝転がって動かない俺に近づく。俺に気づいた子供の俺は仇を見るような目で俺を睨む。

「よっす俺。お互いご愁傷様だな」
「…死ね」
「ご挨拶だな。同じ俺じゃねえかよ仲良くしようぜ？」
「…死んだら仲良くしてやるよ」
「お、じゃあ問題ないな。俺死んでるし」
「……」
やっぱりまだ子供だわ。もう詰まってやがる。もう一回死ねくらい返してもいいと思うけどやっぱ優しいね。
「俺がお前の代わりに生き返るって話になってるけど、それでいいのか？」
「別に…もう関係無いし」
「本当に？」
「うるさいな！誰も助けてくれないのにどうやって戦えってんだよ！」
「お前の世界じゃデュエルが強かったらいいんだろ？だったら簡単じゃねえか」
「それが出来たら苦労しないよ…強いカードはみんなあいつらにとられたんだ!!」
「強いっていっても攻撃力の高いカードとかだろ？効果ダメージで潰せばいいんだよ」
「…無理だよ。僕は弱いもん」

完全に卑屈になってるな。まあカードを奪われたんだし辛いのも当然だよな。
「なあ女神様よー。転生って事はなんか特典ないのかなー」
「特典？ええっと…貴方の所持しているデッキでしたら…」
「俺デッキ二十個以上あるけどそれ全部いいの？」
「「にじゅっ？!!」
女神様も子供の俺もビックリして大声を出してる。子供の俺の世界だとデッキ複数持ちって珍しいのかな？
「…ま、まあ頼みを聞いていただいてる立場ですから、構いません。カードも向こうの世界に規格を合わせておきますね」
「お、ありがたいねー持って行っても向こうじゃ使えないよなんて洒落にならないからねー」
女神様にお礼してから子供の俺に向き直る。自分と向き直れなんて言われる事はあったけど実際向き直るなんて不思議な事もあるもんだよ全く。
「なあ俺よ、お前が生前どれだけの苦しみを受けてきたか俺には到底理解出来ない。でもお前が受けてきた苦しみをお前に与えてきたやつらに返してやる事は出来る。生き返るからな」
「……頼んでないよ」

「ああ、お前はそんな事願わないだろうさ、何せ俺なんだからな。どこまで行ってもお人よしの勝俊君よ。でもそれでいい。俺は勝手にやらせてもらう。お前の人生貰ってな」
「……好きにすれば」
「ああ好きにするさ。そんじゃ女神様！」
「は、はい！」
「こいつの記憶、頼むぜ」
「はい、では勝俊さん、貴方は次に目覚めるとそこは病院です。記憶の混濁が生じ身体も小さくなって不便とは思いますが第二の人生お好きなように生きてください」
「あいよ。まあ精々頑張って生きるわ」
「では、

転生陣展開!!」
女神様が大声で叫ぶと魔法陣が俺の足元に現れた。なんか転生っぽい！
「だから転生ですって!!」
心読まないでくんない？
そんな俺を余所に転生の魔法陣は光輝き意識が消えていく。でもその前に

「勝俊!!」
「っ…何?」
「戻りたくなってももうお前は勝俊じゃなくなる。だから

俺の弟になれ!!」
「っ!」
「デュエルを教えてやる。友達の作り方も、勉強もな。気が向いたらいつでも来いよ!」
そう言い終えると俺の意識は完全に消えた。ちゃんと伝わってるといいけど。
一応言っておくが、これは俺がデュエルが根付いた平行世界でただひたすらにデュエルを満喫するという話だ。まあ暇つぶし程度に付き合ってくれ。

# 最初は全力でいかないと力量を量れない

目が覚めるとそこは知らない天井だった。待って一回やってみたかったのブラウザバックしないで。

女神様の言った通りここは病院らしい。頭に包帯が巻かれてるし、腕も固定されてる。話の通り手酷くやられたんだな。机に俺の私物らしき物があるけどカードは破かれた〝エルフの剣士〟だけ。残りは全部いじめっ子に持ってかれたんだろうさ。

「デュエリストだってのにカードを大切にしないとか恥ずかしくないのか？っと」

引き出しを確認すると手紙が入ってた。女神様からだった。

『勝俊さんへ

この手紙を読んでいるという事は転生が完了したという事。これから貴方の第二の人生が始まります。お話した通りこの世界ではデュエルモンスターズが社会で浸透しています。貴方のデッキはご自宅に送りましたのでそちらをお使いください。こちらの勝俊さんをいじめていた子達をどうするかは貴方に委ねます。

出来る事ならあの子の分まで貴方が幸福になってください。

女神より」

「…最後まで自分の名前は明かさないのね。まあそういうシステムなだけなのかもしれないけど」

神とは感情が無いただのシステムだという話をどこかで聞いたことがある。どこで聞いたかも覚えてないけど面白いなと思ってたんだ。記憶といえばこっちの俺の記憶だ。何となくだけど俺の身に覚えのない記憶が浮かんでくる。今は十歳、今年はまだ誕生日を迎えてないから五年生か。カードプールは…じゅ、十一期まである…だと…！

「にしても気持ち悪い。融合召喚の時のモンスターもこんな感じなんかな」

いくらこっちの自分とはいえ他人の記憶が混ざるっていうのは予想以上に辛い。記憶が混ざり合うなんてこれから先有り得ないけど、二度とやりたくないわ。

「えっと…ナースコール押せばいいのか？」

ナースコールを押すとすぐに看護師のお姉さんが来てくれた。凄い慌てた様子だったけどまあ死にかけてたから当然…なのか？

「……信じられない。つい昨日まで意識不明だったのに」

医者の先生が信じられないものを見るような目で俺を見てくる。話を聞くとこの体は二週間意識不明で死亡判定を下してもおかしくなかったそうな。まあ生き返ったか

らそうはならなかったけど。

「兎に角、ご両親に連絡を入れておくからね。それと今日は大事をとって安静にして、明日検査するから。食事はとれそうかい？」

「はい、寧ろ腹減っちゃって」

「そうか、なら用意しておこう。丁度夕飯時だしね」

俺としてはデッキを確認したかったから早く帰りたい所だったけど先生が許してくれないだろうし帰れるのは明後日になるのか…その間デッキ触れないからかなり暇だな。

「にしても、デュエルが社会に…ねぇ…」

テレビを付けてみると新しいパックのＣＭが流れて、ニュースが入れば世界ランキングの上位者について言及されていた。

『いやーランキング１位〝Ｊ〟のデュエルはやはり圧巻ですね！何よりエースモンスターの〝Ｆ・Ｇ・Ｄ（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）〟！あれを倒す事のできるモンスターが果たしているのか、これからの挑戦者にも注目が集まりますね』

『Ｊの強さは確かにＦ・Ｇ・Ｄもそうですが何より相手のフィールドを蹂躙する展開力にもあります。ドラゴン族特有の大量展開で妨害が追い付かないほどの物量で攻め落とすという戦略もダイナミックで見ごたえがあるんですよ』

ランキング1位のエースが…F・G・Dだと…!ただの５０００打点と光以外の戦闘耐性なんてオネストのカモだぞ?1位でこれだと2位以下のデュエリストってどうなってんだよ…

「これまさかアニメ次元みたいなやつか?だとしたらデッキクソザコでも運命力バグってるんか?」

アニメのデュエルで熱くなる理由はトップ解決を地でいく運命力だ。「次のターンお前は負ける!」というのが負けフラグになる世界だったがもしかしてＯＣＧ次元出身だからといってぬるいデュエルをするとヤバい?

「勝俊!!」

そんな事を考えていると病室の扉が開いた。先生が連絡したのだろう母さんだ。

「ああ勝俊、ごめんね…本当にごめんなさい…」

「母さん、もう面会時間過ぎてるのに」

「何言ってるの!息子が目を覚ましたのに会いに来ない親がどこにいるって言うのよ!」

「でも母さんおれのＳＯＳ全部切り捨ててたよね。遊んでるだけだって」

「それは…お母さんが間違っていたわ。あなたの言葉を無視して、母親失格だって思ってる。あなたもお母さんを信じられないって思ってると思う。だけど私はあなた

の味方よ」
俺に対して許しを請うように見つめる母。でも俺は知っている。この人は俺を、というよりはこっちの俺を何とも思っていないと。こっちの俺のＳＯＳを尽く無視してきた。それどころか俺に興味なんて欠片も無く兄貴しか気にかけていなかった。
「じゃあさ、お願い聞いてもらっていいかな」
「ええ！なんでも言って！」

それから二日経ち、退院の日となった。先生やお姉さんも見送りに来てくれている。
「それじゃあ、何かあったら電話してください。意識が回復して健康状態も良好とはいえ、油断は出来ないからね」
「はい、二週間ありがとうございました」
「しかし君の精神力というか、生きたいという意思は凄まじいな。あのような状況から意識を取り戻すなんて並のものじゃ無理だ」
「あ、あはは…」
まあ俺は俺でも中身が違うんだけどな。それを知るのは俺だけだし誰かに言う気も無いから笑って誤魔化すしかない。

「では、ありがとうございました」
「お大事に」
母さんの乗ってきた車で病院を後にする。行先は

カードショップだ!!

「おお～～～」
カードショップに着いた俺は思わず感嘆の声をあげた。でもそれくらい規模がデカいのなんのって、パックは勿論シングルにサプライ、デュエルディスクがある！これに興奮しないなんてデュエリストじゃねえ!!
「勝俊、デュエルディスクが壊れたわよね。新しいの買ってあげる」
「本当？ラッキーありがとう」
デュエルディスクが手に入る？しかもソリットビジョンを使ってデュエル？子供の頃の夢が現実になるって事じゃねえかやったあああああああ!!!

平日昼間という事もあって他の客が少ないからじっくり選べるのも良い。やはりこういった買い物はゆっくり静かに選びたいよな。デュエルディスクも種類が多くて悩む。初代とかＧＸのモデルは勿論ゼアルのモデルもある。流石にアークファイブみたいなリアルソリットビジョンの上にカードを置くような技術は無いのが悲しいけど十分だな。

「前のデュエルディスクは初期モデルだったし、このパッドモデルにしたら？」

母さんはゼアルのモデルを指さす。確かにゼアルも好きだけどどっちかっていうと初代の方が好きだし

「いや、前と同じモデルでいくよ。気に入ってるし、この色合いが好きなんだ」

この言葉に嘘は無い。実際初代のデュエルディスクはデザインが完成されてるし、ＧＸのモデルは小さい頃ちょっとダサいって思ってた。今だとカッコいいって思うけど子供は初代の方がいいって言うと思う。

「そう？こっちの方が持ちやすいと思うけど…」

「こういうのは持ちやすいとかじゃないよ。どれだけ自分に合うか、自分が気に入った物じゃないとデュエルも楽しめないよ」

なんならスリーブもこだわりたい。チラッと見ただけでもエース級モンスターのスリーブがいくつも見えた。青眼ブラマジ真紅眼ネオススタダホープオッＰ…他にもあ

りそうだから元居た世界よりも充実してるのは明白だ。こんなの満足するしかねえ!!

「じゃあ後はデッキね。スターターデッキがあったけどどれにする?」

「いや、ストラクチャーデッキにするよ。テーマデッキを組みたいって思ってた所だったし」

ストラクチャーデッキのコーナーを見てみるとドラゴンや戦士、植物機械とそれぞれのテーマを主としたデッキが並んでる。値段は…っげ!６５００!?

「レシピは…えぇ…?」

戦士族のデッキを見てみると、そのレシピは元の世界の昔のストラクチャーデッキにも負けず劣らずに酷い内容だった。〝ギルフォード・ザ・ライトニング〟〝切り込み隊長〟〝荒野の女戦士〟はいいとして〝オシロ・ヒーロー〟〝コピックス〟といった取り敢えず入れたみたいなカードに〝ジュッテ・ナイト〟もシンクロがギミックに無いのになんで入ってるのか分からない。デッキパーツとしてはいいかもしれないけどストラクチャーデッキどころの話じゃない。

「パックの方がまだマシかも…」

「どうして?このデッキとかよさそうじゃない」

そういって母さんが手に取ったのは植物族。〝ローン・ファイア・ブロッサム〟や〝にん人〟〝イービル・ソーン〟もいいカードだけど

「〝ダンディ・ライオン〟は禁止カードだよ母さん」
「え？じゃあなんで入ってるの？」
「多分このデッキが発売する時にはまだ使えたんだよ。その後に禁止になったけどその前に生産されたこれはそのまま残ってるって訳」
これは元の世界でもあった。バルブやトーチもリンクに使えたから採録されてたけど後にしっかり禁止になったなクソッタレ。
「取り敢えず今日はディスクとスリーブとパック買って帰ろう。それから考えるさ」
「そう？…ならいいけど」
デュエルディスクは２５０００円、スリーブも７００円と案外安い。十万くらい覚悟してたけどそんな事はなかった。スリーブはもっと欲しかったけど小遣い貯めてコンプリートするんだ……！

「よし、デッキ確認やるか」
家に帰ってから自室に籠って俺は送られてきたデッキを見つけた。部屋に身に覚えのない物があるってなったら家族も怪しむだろうから見つからないような場所にあったのは女神様ナイス判断。数が数だったからかストレージ二つに分かれている。
「青眼、ジャンド、ブラマジ、三幻魔、三幻神、ＢＦ、ドラグニティ、シャドール、リ

ンク…全部あるな」
　二十数個あるデッキはサイド含めて全て入っていた。スリーブは適応して無かったから外されているけどそれはすぐ買い直す。取り敢えず買ったスリーブにデッキを入れていこう。
「しかしここはここで金使いが荒くなるな。間違いなく足りねえって」
　シングルカードなんてバイトしたって難しい。ストレージとかワゴンで売られてるのはまだしもショーケースのカードはどれも三千円以上した。ファイルもあったけどそっちは十万するカードが当たり前のようにコピー品で表示されてる。盗難防止の力の入れようが元の世界の比じゃない。スリーブはスリーブで数が多いからその時にどれを買うかすら迷う。
「よし、入れ終わった。んんっ…寝よう」
　カードショップで興奮し過ぎたせいか眠い。カード確認だけでも二時間かかってた。明日は学校あるっぽいし早めに…ん？
「勝俊、少し…いいかしら？」
「母さん、改まってどうしたの？」
「ええ、勝俊

転校、したい？」

母さんの口から出たのは意外なものだった。今日は罪悪感とかが作用して色々買ってくれたんだろうけど兄貴の方を優先して考えると思ったけど…

「お父さんがね、神奈川に転勤するの。それに付いて行ったらどうかなって」

ああ成程ね。父さんの転勤は元の世界では無かったけどこっちとの差異ってやつだ。そしてそのついでに俺も消えろと。

「いいよ。いつから？」

「一週間後よ。ごめんなさいね、急で」

「本当だよ。まあ友達もいないし別れを言う相手もいないしね」

「え？陽菜ちゃんはいいの？」

その名前を聞くと共に俺の表情が消えるのが分かった。園田陽菜は俺の幼馴染で家族ぐるみで付き合いがある。元の世界でも変わらず、死ぬ直前だった高校時代にもそれは変わらなかった。

でもこっちでは違う。

幼馴染は変わらないけど俺の優しさが仇になったのか三年からいじめが始まった。陽菜は篠田剛と虎依哲平を中心としたいじめグループで俺を袋叩きにしてカードを奪ってきた。正直こっちの陽菜と仲よくしろと言われてもまず間違いなく殴りかかる。

絶対ぶん殴る。
「大丈夫だよ。向こうだって俺とつるむ気ないって」
「でも…昔から一緒だったのに」
「昔とは違うって事だよ。一週間ね、準備しとかなきゃ」
「あ、そうだったわ。これ来てたわよ」
そういって母さんが差し出したのは一枚のはがきだった。内容は
「デュエルフェス？」
「今年は絶対行くんだーって言ってたもんね。一週間後だし、引っ越しが終わったら行けるようになるわよ」
「おぉ、楽しみが出来たな」
「……」
母さんがどこか物憂げに見てくるけど気にしない。そのまま母さんも部屋を出たから俺も歯を磨いて床に就いた。

目が覚め、自分の部屋にいる事が俺が転生したんだと認識させられる。でもこれからはデュエルが楽しめるんだ。ワクワクするぜ！着替えて通学用の鞄にデュエルディス

クとデッキと勉強道具を入れ、リビングに向かう。母さんが朝食を作り終えていた。といってもパンと目玉焼きだが。

「おはよう勝俊。大和はもう出たわよ」

「おはよう。まあ朝練あるんだしね。俺は関係ありませんよっと、いただきます」

手早く食べ終え鞄を持って玄関に向かう。靴を履いて扉を開ける。

「行ってきまーす」

「いってらっしゃーい」

学校の道は俺も良く知る坂道だ。街並みもデュエルに関するものを除けば何も変わらない。そして

「おいおい、こんな所にクズがあるぜ！誰だよクズを勝手に捨てた奴はよぉ!!」

馬鹿でかい声も相変わらずだ。とはいってもこっちの俺にとって変わらないんだが。

「言ってやるなよ剛、こいつは自分が主人公だって信じてるんだからアッハッハッハ!!」

「それもそうだな！主人公は最初クズだったりするのが多いもんな！まあこいつはクズのまま死ぬけど！」

自分が差別主義者だって公に言える胆力すげえな。脳みそ馬バエに犯されてんのか。

後ろなんて向かなくても分かる。篠田と虎依、そして陽菜だろう。まるでのび太の気分だ。

「おい、無視してんじゃねえよ。また買って貰ったんだろ?よこせ」

「……は?」

会って早々に乞食とか親が泣くな。まあ親も親で物乞いしろって教えてるんだろうけど

「は?じゃねえよ。友達料だよ。カード四十枚早くよこせ」

「俺の分も忘れるなよ!」

篠田に便乗するように虎依もたかりに来る。だが当然

「お断りだ」

「な?!」

「寧ろ聞くが、お前達は自分でカードを手に入れる考えが無いのか?お前達の両親は今回の件を知ってるのか?それを知ってるんだとしたらなんで同じ事をやろうと考えられるんだろうな。ああ、お前達の両親も揃って乞食なのか」

「ああ!ふざけんじゃねえ!こうなったらデュエルだ。俺が勝ったらお前のカードを全部貰うぞ!」

「いいだろう!しかしお前が負けたら今までの清算をしてもらう!」

「デュエル!!」
睦月勝俊
ＬＰ４０００
ＶＳ
篠田剛
ＬＰ４０００
俺がこの世界で驚いたのは、小学生まではライフが４０００で進んで中学以降は８０００になる。つまりより早くデュエルの決着が付くんだ。
「俺のターン！俺は〝Ｙ―ドラゴン・ヘッド〟を召喚！ターンエンドだ」
「は？」
バック無しに棒立ち１体？小学生だとしてももう少しマシなやつあるだろ。
「なんだ？ビビったのか？お前のカードはクズばかりだもんな！」
「お前馬鹿にしてんのか？バックも無しによく威勢よくできたもんだ」
「なんだと!?　お前みたいなクズが俺のたくあんを馬鹿に出来るのかよ！」
「沢庵じゃなくてタクティクスだ脳無し。ライフ４０００を精々大事にするべきだったな。俺のターン、手札の〝磁石の戦士α（マグネット・ウォリアー）〟〝磁石の戦士β（マグネット・ウォリアー）〟〝磁石の戦士γ（マグネット・ウォリアー）〟をリリースして〝磁石の戦士マグネット・バルキリオン〟を特殊召喚！」

磁石の戦士マグネット・バルキリオン
ＡＴＫ３５００／ＤＥＦ３８５０
「攻撃力…３５００!?」
「マグネット・バルキリオンの効果発動。自身をリリースして墓地のα、β、γを特殊召喚する」
「はぁ?こいつ馬鹿だぜ。折角のモンスターを墓地に送ってやがる!俺の方が有効活用出来るんだから俺が使うべきなんだよ!」
「残念だがお前じゃ無理だ。俺以上に俺のデッキを理解していないやつはいないってな。速攻魔法〝マグネット・リバース〟発動!墓地または除外されている特殊召喚出来ないモンスターを召喚条件を無視して特殊召喚出来る。マグネット・バルキリオン!」
「そ、そんな…」
「温いデュエルだ。バトル!βでＹ―ドラゴン・ヘッドを攻撃!」
篠田剛
ＬＰ４０００→３８００
「続いてαのダイレクトアタック!」
ＬＰ３８００→２４００
「お、俺の…俺の最強デッキが…」

「こんなので最強なんてな。最強って言葉を辞書で調べ直してこい。マグネット・バルキリオンで攻撃！・マグネット・ソード!!」

ＬＰ２４００→０

「うあああああああ!!」

「お前に、デュエリストを名乗る資格は無い!!」

# 強いのは強いなりに理由があったりする

「そんな…俺が……こんなクズに……」

デュエルで敗北した篠田は現実を受け入れられずに固まっている。敗北どころかワンキルかまされた相手が自分が今まで見下してた奴なのもあってショックなのだろうがそんな事は俺の知った事じゃない。

「デュエルは俺の勝ちだ。約束通り今までの清算をしてもらう」

「ふ、ふざけんな！なんでお前カード持ってんだよ！全部奪ったはずだぞ!!」

「そんな事、俺が知るか。さあ清算の時間だ。今まで奪ったカード全て返してもらう。当然焼き捨てたり破り捨てたカードも同様だ」

「は、はあ？　なんでお前の言う事なんて聞かないといけないんだよ。あんなの冗談だろ？」

「俺は勝者。お前は敗者。更に言えばお前らがやってきたのは少年法で裁かれないだけの犯罪だし行動を起こしたって事は冗談なんてとっくに超えてるんだよ。逆に俺がやり返したって捕まらないんだぞ？　やり返されるのが好みだったりするのか？」

少年院に入れられる可能性はあるしこいつと同じような事をカードにやるつもりは

無いけど今の状態なら噛みついてくるだろうな。適当こいてるだけで少し考えればそんな事するはずも無いのに。

「う、うるせえ！今のは運が良かっただけだろ！もう一回だ！」

「何度やっても結果は変わらない。それでもというなら、次は放課後だ。なんなら助っ人でも連れて来いよ」

流石に今からだと時間が押すからそれは避けたい。篠田も虎依も俺を睨みつけて走り去っていった。

「強くなったね。勝俊」

陽菜（地雷）を残して。

「…なんでお前は残ってんだよ」

「そりゃ私は勝俊の幼馴染だし一緒にいるのは当然でしょ」

「よく言うぜ。俺が死にかけた原因のくせに」

「は？　私は悪くないもん。あんなの事故だよ」

「そんな屁理屈通ると思ってるのか？　お前は幼馴染とか言ってるが俺からしたらお前は俺を殺そうとした敵だ。そんな奴に近寄られていい気分になると思うのか？」

「…何？　感じ悪いよ？」

「その原因が何にあるのか考えるんだな。まあお前には一生無理だろうがな」

こいつと並んで歩くなんてまっぴらだ。登校遅刻ギリギリになるまでどっかで時間潰すか。

「あ、待ってよ！」

「付いてくんな。お前といると碌なことが無い」

「何それ。勝俊なんか変だよ？　今までそんな事言わなかったのになんか人が変わったみたい」

「それだけの事をしたって自覚するんだな。さっさと消えろ」

後ろで騒いでる陽菜を無視して俺はこの世界での俺の思い出を掘り起こしに行く。向かった先は俺自身にも繋がる思い出の場所。

「懐かしいな。ここも」

俺が来た場所はこの町が出来てから五十周年の時に作られたらしい公園だ。デュエルが浸透しているせいか所々変わってるけど思い出の中の公園だった。

「ここももうすぐ来なくなるんだよな。見納めってやつか」

俺の記憶でもここは強く残ってる。草木の茂る場所だったからカブトムシを採りに父さんと夜に張り込んでたっけ。面積も広いから鬼ごっこにも丁度良かった。

「全ては、俺が幸福を享受する為」

その為には今の枷を捨てなければいけない。俺が紡いだ思い出も、この世界の俺が受けてきた痛みも。

「……行くか」

少し早い気もするけど、俺は学校に行くことにした。

残っている決着をつける為に。

「おい…来たぜ……」

俺が教室に入った瞬間クラスの空気が変わった。多分篠田の話を聞いたんだろう。次は自分なんじゃないかってビクビクしてるんだろうな。だったら最初からあんな事しなきゃいいのにって話は野暮か？

「おい睦月、もうすぐチャイム鳴るぞ。席付け」
入り口前にいる俺をせっつくように担任の『小暮大貴』が教室に入ってくる。こいつもいじめを黙認してたって意味では同罪だ。
「へいへい、どきますよっと」
「なんだ？　随分生意気じゃないか。篠田を倒したから調子乗っちゃってんのか？」
「耳が早いんだな。篠田がチクったか？」
「お前ももうすぐここからいなくなるからなぁ。最後くらい皆に気前よくカードを配ったっていいんじゃないか？」
「ならあんたがそうなった時もそうするのか？」
「は？　するわけないだろ。俺のカードはお前見たいなガキには早いんだよ」
あからさまな反応。いじめはこいつ主導だったのか？　だとしたらかなりの屑だぞ。遊戯王の大人は色んな形で屑が出るけどこいつも大概だな。
「じゃあ今日のデュエル実習で決着としようぜ。あんたが俺に勝てばデッキごとくれてやるぜ。でもあんたが負けたら」
「俺が負ける訳無いだろう。いいぞ受けてやる。負けたらお前が受けてたいじめの解決にも協力してやるよ」
「そんなもんいらん。あんたのデッキをよこせ」

「な！そんな事「受けてもらうぜ。それとも怖いのか？」…言うじゃねえか。乗ってやるよ。互いのデッキをかけてな!!」

教師としてはどうかと思うが、思惑通り小暮はデュエルに応じた。デッキ内容は篠田から聞いてるだろうけど、俺のデッキはあれだけなんて言ってないしな。悪く思わないでもらおう。

「さあデュエルの時間だ。皆対戦の相手を見つけてデュエルするように。そして睦月！今朝言った事を覚えているな？」

昼前最後の授業のデュエル実習は生徒達が学校でカードを公に触れられる機会。しかし今日の実習は別のざわつきを見せた。まあその理由は俺なんだけど。

「分かってるってそう騒ぐなよ。それとも空元気か？」

「その減らず口すぐ聞けなくしてやる。行くぞ！」

「「デュエル!!」」

睦月勝俊

ＶＳ
小暮大貴
ＬＰ４０００
「俺が先攻だ！〝激昂のミノタウルス〟を召喚！」
獣、鳥獣、獣戦士に貫通効果を付与する獣戦士族。教師だし流石に何かあるはずだけど
「更に装備魔法〝デーモンの斧〟を装備！　これで攻撃力２７００だ！」
体育館がどよめく。中にはもう俺は勝てないとかのたまってるが、こんなもの問題にすらならない。てか十一期までカードプールがあるのに未だに四期くらいのカードプールしか確認出来て無いんだけど。
「で、他は？」
「生意気なガキが…カードを１枚伏せてターンエンドだ！」
篠田よりはるかにマシだけどそれにしても酷い。あのクソッタレには悪いけど手早く終わらせよう。
「俺のターン。速攻魔法〝ツイン・ツイスター〟を発動。手札１枚を墓地に送ってフィールドの魔法・罠カードを２枚まで破壊する。セットカードを破壊」
伏せは〝炸裂装甲（リアクティブ・アーマー）〟だった。ミラフォの下位互換じゃん。せめて〝激流葬〟入れ

ろよ。

「ふんっリバースカードを破壊するのに随分手札を使うじゃないか。篠田の評価も期待出来んな」

「〝マジシャンズ・ロッド〟を召喚。召喚成功時、デッキから〝ブラック・マジシャン〟がテキストに書かれた魔法・罠カードを1枚手札に加える」

「ぶ、ブラック・マジシャン!?」

体育館がさっきより大きくどよめいた。こっちでもブラック・マジシャンは有名なんだな。歴史あるカードか希少か、バニラを入れているのかと馬鹿にするか。

「デュエルモンスターズで話題に出ない事は無い伝説のカード。それをなんでお前如きが!」

「さてね。俺は持ってるカードで戦うだけだ。〝黒魔術の秘儀〟を手札に加える。手札1枚を墓地に送って〝幻想の見習い魔導師〟の効果を発動。自身を特殊召喚する。見習い魔導師の効果発動。特殊召喚に成功した場合デッキからブラック・マジシャンを手札に加える。〝イリュージョン・オブ・カオス〟の効果発動。手札のこのカードを見せる事でデッキから〝ブラック・マジシャン〟がテキストに書かれたモンスターを手札に加え、手札1枚をデッキトップに戻す。〝マジシャンズ・ソウルズ〟を手札に加え手札をデッキトップへ。マジシャンズ・ソウルズの効果発動。デッキからレベル7以下の

魔法使い族〝守護神官マナ〟を墓地へ送り、自身を特殊召喚。手札の魔法・罠カードを墓地へ送ってマジシャンズ・ソウルズの効果、デッキから２枚ドロー」

やばい、ここまでデッキが回ると寧ろ怖くなる。二ビル握ってたら笑うしか無いんだけど？

「ライフ１０００をコストに〝黒魔術のベール〟を発動。手札・墓地の魔法使い族〝ブラック・マジシャン・ガール〟を特殊召喚」

ＬＰ４０００→３０００

「「ぶぶブラック・マジシャン・ガールゥウウウ!!?」」

今度は全員が全員同じ反応を返した。五月蠅いな。

「おおおおお前なんでブラマジガール持ってんだよ！それ大会参加者と観戦者にしか配られてない超レアカードだろ!?」

「持ってるって事はそういう事だ。うだうだいうな」

この世界の俺の記憶にも大会観戦に行った記憶が存在してる。まあ兄貴に持ってかれたっぽいけど。

「そんな事はいいバトルだ。ブラック・マジシャン・ガールで激昂のミノタウルスを攻撃」

「は？　激昂のミノタウルスは２７００だぞ。返り討ちで「幻想の見習い魔導師の効

果発動。自身以外の魔法使い族・闇属性モンスターが戦闘を行うダメージ計算時、このカードをリリースして戦闘するモンスターの攻撃力を２０００アップさせる。これでＢＭＧは４０００だ」何だと！」

小暮大貴

ＬＰ４０００→２７００

「だ、だがその攻撃力もこのターンまで！その攻撃力じゃ俺のライフを削り切れない！次のターンで〝ライトニング・ボルテックス〟を引けば逆転だ！」

「何勘違いしてるんだ？」

「な、何がだ」

「俺の手札にはまだ４枚もカードが残ってるのに生き残れるってかんがえるのは早いって」

「な、何を言ってるんだ！マジシャンズ・ロッドでもライフは１１００残る。効果破壊のカードだって……ま、まさか全部効果破壊のカードなのか！」

「さっき秘儀とブラマジ入れてたじゃねえか。速攻魔法黒魔術の秘儀を発動。手札のブラック・マジシャンと〝マジシャン・オブ・カオス〟を融合。〝超魔導戦士―マスター・オブ・カオス〟を融合召喚！」

超魔導戦士―マスター・オブ・カオス

ＡＴＫ３０００／ＤＥＦ２５００
「攻撃力……３０００……？」
「速攻魔法で召喚されたマスター・オブ・カオスのバトルは有効。プレイヤーにダイレクトアタック!!」
「う、うわあああああああああああああ!!」
小暮大貴
ＬＰ２７００→０

「俺の勝ちだな」
「そんな……俺が……ガキにすら勝てないなんて……」
小暮は項垂れてるけど、約束は約束。デッキはもらわないと「君たち何をやっている!」こうなるから早く渡して欲しかったんだけどなぁ。
「篠田君から聞きましたよ。アンティデュエルをやっているとね。君が持ち掛けたんだね!」

「そもそもこの教師が生徒にカードをばらまけなんて抜かすからです。カードはデュエリストの魂。それをばらまけなんてまずデュエリストとして可笑しいと思うんですが」
「そ、そんな事を言ったんですか！小暮先生！」
「そ、それは……」
「……取り敢えず授業は一度終わりです。小暮先生、後で校長室に来るように。睦月君も、後日来てもらいます。転校の話も含めて」
「はいはい、分かりましたよっと」
それだけ言い残して体育館を後にする。俺に声をかけるやつは当然ながらいなかった。

# 本気のデュエルは当分先

小暮大貴が校長室に連行された事以外は何事もなく放課後を迎えた。鞄を背負ったと同時に教室の扉が開く。

「睦月！てめえさっきはよくもやってくれたな！今度はぶっ潰してやる！」

予想通りの篠田登場は正に三下そのものだ。笑えないけど。

「よお篠田、ちゃんと来たな。ワンキルにビビッて来ないかと心配しちまったよ」

「その生意気な口ももう開けないぞ。助っ人を呼べって言ったのはお前だ。お望み通り小学生最強の剛力先輩を連れてきたぜ!!」

そんな篠田の後ろに立ってるのは篠田より頭一つデカい小学生。多分六年生だと思うけど１７０はありそう。そんな名も知らぬ上級生が教室に入り俺の前に立つ。

「お前が剛を泣かしたってヤツか」

「泣かしたかどうかは知らないけど負かしたのは事実だな」

「剛から話は聞いた。お前みたいなのがデュエリストなんて許さねえ。お前が負けたら全てのカードを捨てろ」

予想通りの展開だ。更に言えば二対一とか言うんだろうな。

「お前は助っ人って言ったんだ。タッグデュエルでやるぞ！お前にタッグ相手がいればだけどな！」
「タッグ相手はいらん。ライフはそれぞれっていうのも面倒だしタッグフォースルールでどうだ？フィールド墓地の共有はメリットになると思うが」
「ライフは俺達二人分でやらせてもらう。お前は一人だから一人分だ」
「構わんさ。結果は同じだ」
「お前の負けは変わらないからな！」
虎の威を借る狐と言わんばかりに篠田の威勢は良い。けど虎依の方がそれっぽかったのに腰巾着ポジはお前でいいのか？

グラウンドに出た俺達を待つのは大勢のギャラリーだった。それが俺が負けるのをみて嗤おうとする奴か、ブラマジを見たいミーハーか、いじめっ子が負けるザマを見たいろくでなしか、まあどれでもいいな。
「ライフはどうとでもなるがデッキの枚数は覆しようがない。俺が先攻をもらう」
「そんなの理由にはならない。先攻は俺だ」
タッグフォースルールを理解してるんだろうか。別にいいっちゃいいけど品性を疑

うな。

「あっそ。分かったよ」

「「デュエル!!」」

睦月勝俊

ＬＰ４０００

ＶＳ

篠田剛

剛力謙介

ＬＰ８０００

「俺のターン！〝閃光の結界像〟を召喚。カードを１枚伏せてターンエンドだ」

初っ端から何が来たかと思えば属性毎に特殊召喚を制限する結界像シリーズだ。篠田から使ってた属性を聞き出して使ってない属性かつ自分が使う属性のモンスターを出したんだろう。このデッキは確かにブラマジだしメインは闇だ。でも

「光が無いなんて言ってないよなぁ。俺のターン、〝マジシャンズ・ロッド〟を召喚。召喚時効果によりデッキから〝ブラック・マジシャン〟がテキストに書かれた魔法・罠カードを手札に加える。手札の〝イリュージョン・オブ・カオス〟の効果を発動。相手

に見せる事でデッキから〝ブラック・マジシャン〟がテキストに書かれたモンスターを手札に加え、手札1枚をデッキトップに置く。マジシャンズ・ロッドを墓地へ送り、〝合体竜ティマイオス〟を特殊召喚」

「待てよ、闇属性は特殊召喚出来ないんだぞ」

「ティマイオスは光属性だ安心しろ。まあ何かしらの罠は仕掛けてるんだろうけどそういうのは踏み抜くと楽しいんでね。バトルだ、ティマイオスで閃光の結界像を攻撃」

「そういうならお望み通りやってやるよ。伏せカードオープン！〝炸裂装甲（リアクティブ・アーマー）〟！ティマイオスを破壊する！」

「まあこんなもんか。速攻魔法〝魂のしもべ〟発動。デッキから〝ブラック・マジシャン〟がテキストに書かれたカードを1枚デッキトップに置く。カードを1枚伏せてターンエンド」

バーンか次元幽閉とも思ったけどここにいる奴等にそれを期待した俺が間違ってたのかもしれない。それすら高等テクなんだこの世界は。

「俺のターン！俺は〝X　ヘッド―キャノン〟を召喚！バトルだ！X　ヘッド―キャノンでダイレクトアタック！」

「伏せカード（リバース）発動〝聖なるバリア―ミラーフォース〟。相手の攻撃表示カードを全て破壊する」

「そ、そんなカードまで……」
「お前！折角の俺のカードを！」
「す、すいません」
タッグフォースルールでも向こうの調子は変わらないらしい。あの様子を見るに上級生の方と篠田の関係はお察しだけどそれがマズいって分からないのかなって。
「早くターンを回せ。それともサレンダーか？」
「お、俺はこれでターンエンド」
「おい！なんで伏せカードのひとつも無いんだよ！」
「だ、だって……」
「っち！使えないやつ！これなら俺一人の方がマシだ」
「まあこのターンで終わるんだけどね初見さん。俺のターン。ドローしたカードは〝守護神官マハード〟だ。こいつはドローした時、相手に見せる事で特殊召喚出来る」
「いきなり攻撃力２５００だと？　お前どれだけズルすれば気が済むんだよ！」
唐突に何を言い出すかと思えば見当違いも甚だしい言いがかりだった。こういうのは正論ブチ当てたくなる。
「因みに聞くけどどこがズルだって？」
「だってそうだろ。いきなり出てくる攻撃力の高いモンスター、ミラーフォースなん

ていう高額カード、さっきのマハードってやつだって何かズルして仕込んだんだろ！」
本当に見当違いだった。しかも質が悪い事にカード宣言を何一つとして聞いて無い。
「ティマイオスは自分フィールドの魔法使い族モンスター、〝ブラック・マジシャン〟がテキストに書かれた魔法・罠カードを墓地へ送って特殊召喚出来る。魂のしもべは自分のデッキから〝ブラック・マジシャン〟がテキストに書かれたモンスターをデッキトップに置ける。マハードは今言った効果と破壊された場合にブラック・マジシャンを手札・デッキ・墓地から特殊召喚出来る。何一つとしてルールに反したカードは使ってない。オーケー？」
「ふざけんな！だったらそのカードをよこせ！」
「どこをどう聞いたらそうなるんだ？」
「お前みたいなのが持ってたって意味ないんだよ！俺が持ってこそ輝くんだ。カードもそうだって言ってるぞ！」
こいつ話を聞かないどころか俺のカードが俺から離れたいって擬人法持ち出して来やがった。正論言っても無駄なタイプだったけどまあそれを証明するのがこのデュエルなわけで。
「だったらデュエルに勝て。ターンを続けるぞ。永続魔法〝黒の魔法陣〟を発動。発動処理としてデッキトップ3枚を確認して〝ブラック・マジシャン〟がテキストに書か

れた魔法・罠カードを1枚手札に加え、残りを好きな順番でデッキトップに戻す。イリュージョン・オブ・カオスの効果発動。デッキから〝マジシャンズ・ソウルズ〟を手札に加え、手札をデッキトップに。〝守護神官マナ〟をデッキから墓地へ送ってマジシャンズ・ソウルズを特殊召喚。速攻魔法〝黒魔術の秘儀〟発動。手札のブラック・マジシャンとイリュージョン・オブ・カオスを融合。〝超魔導戦士―マスター・オブ・カオス〟を融合召喚。マスター・オブ・カオスの効果発動。墓地の闇属性モンスターであるブラック・マジシャンを特殊召喚。魂のしもべの2つ目の効果、墓地のこのカードを除外してフィールド、墓地に存在する〝ブラック・マジシャン〟、〝ブラック・マジシャン・ガール〟、〝守護神官マハード〟、〝守護神官マナ〟の種類だけドローする。3種類いるから3枚ドロー。〝チョコ・マジシャン・ガール〟を召喚。効果で手札の魔法使い族を捨てて1枚ドロー。これだけやればいいか」

「嘘だろ……こんなにまでなるのか……?」

「バトルだ。ブラック・マジシャン、マハード、マスター・オブ・カオスの総攻撃。8000ジャストで終わりだ」

二人の魔術師の魔力弾がいじめっ子コンビに襲い掛かり、それに追い打ちをかけるように魔導戦士の一撃がグラウンドに響き渡る。二人は叫び声をあげるよりも早く吹き飛ばされた。ソリッドビジョンだよな?

篠田・剛力
ＬＰ８０００→５５００→３０００→０

「俺の勝ちだな。ではお前からも全てのカードを貰おう」
「ふ、ふざけんな！そんな約束してないだろうが！」
「話を聞かなかったのが悪い。第一お前が一方的に言ったんだから俺が勝った時にも同じ事が生じるに決まってるだろ。それとも三本先取にするか？結果は同じだが」
篠田に至っては最早抜け殻同然だ。放っておいても勝手に差し出してくれるだろう。次はこいつの心を折らないとな。なんかムカつくし。
「言っておくがお前が勝ったのだってまぐれだ。ブラック・マジシャンを使ったとしても次は俺が「ああそういうのいいから」はぁ？」
「篠田も同じ事言ってたよ。次は勝つって。その結果がこれだ。ライフを削れないまま負けるのがデフォになる前に諦めとけって」
「てめえ……」
「それでも挑戦するって言うなら次はそのデッキを挑戦料として差し出せ。正直俺より弱いヤツを一方的に嬲るのは趣味じゃないんだ」
「弱い……だと！」

「弱いだろ？　モンスター1体、伏せ1枚で終わって何がしたかったんだか。バック破壊カードがあったらどうするつもりだったんだ？　結界像を破壊するカードがあったら？　もう少しコンボの一つも考えろ。その程度じゃすぐ潰されるぞ」

「は……ぁ……」

デカい図体がみるみる小さくなっていく。まあコンボ一つ考えられないんじゃプロどころかデュエルアカデミアにすら入学出来ない。中等部からあるけど高等部編入で十分だな。

「それじゃ、日を改めてカードはいただく。逃げんなよ？」

剛力とかいう先輩は何もしてないけど味方した相手が悪かったと諦めてもらう。どうせあと一週間も無いんだ。今までの分代わりに暴れさせてもらおう。

# それは最早兄弟喧嘩ですらない

小暮と剛力篠田ペアとのデュエルから四日が経った。その間もデュエルを挑まれては返り討ちにしたりこの世界の俺をいじめていた奴等をデュエルで倒していた。パーフェクトゲームをかましてるのに挑んでくる奴は大抵アンティルールでブラック・マジシャンデッキを狙ってきた。まあ返り討ちにしてデッキを頂いてるんだが。

小暮と剛力、篠田に関しては過去に起こしたいじめやカード強奪が発覚。小暮は懲戒免職処分が下り俺にデッキを渡して学校を去り、剛力もアンティルールで賭けたデッキを俺に渡した。篠田はデッキと俺から奪ったカード、燃やし破り捨てたカードの補填含めて全てを俺に差し出した。もうデュエリストとしてはやっていけないだろう。しかし校長はこれらを条件にいじめを刑事事件としては立件しないで欲しいと頼んできた。面倒事を回避したい校長の気持ちも分かるが、篠田からの補填ではカードの損失分は賄えない。こっちの俺もかなりカードを集めてたようで紛失した中にはレアカードも含まれていた。１枚でもかなりの値段がするのに少なくとも１０枚以上は紛失してるから数万は最低でもかかる。失ったカードは再び集めるつもりだからここはがめつく行かせてもらった。

補填分はいじめていた奴等からカードとして回収。足りない分は保護者と話どうするかを決める手筈となった。最初は保護者も難色を示すわ認めないだのうちの子はそんな事しないだの言ってきたが、本人が認めてしまえば第三者の言葉なぞ意味を持たない。何よりいじめていた奴等は同時にブラック・マジシャンデッキを狙っていた奴等が大半。アンティルールで既に敗北して自分のデッキなぞ当に摩ったボンクラだ。アンティルールは法で定められた決闘だしいじめていた奴等は立派に殺人未遂と器物損壊罪の犯罪者。それを表沙汰にしない措置として提示したのが奪ったしたカードの補填分なのでその内訳をどうするかは保護者が顔を突き合わせて考える問題だ。まあ多くは子供のお年玉を崩して補填に充てるだろうが、間違いなく子供の先行きは暗いだろうな。自業自得だから何の罪悪感も無いけど。

そして今俺が何をしているか、気になる兄貴もいるだろう。

「……」

「お前は本当にどうしようもない屑だな。お前が弟という事実が俺を苛立たせる」

はい、お兄様（マザコンクソ兄貴）です。実は兄がいたんですね知ってたけど。中三のエースらしい我が愚兄こと睦月大和は中体連では全国に行ける程の腕前だがその実態は俺をデッキ調整と称してサンドバッグにしたり持ってるレアカードを奪っていくというグールズも冷や汗ものの真正の屑である。

「屑と言われる理由が無いな。参考までにあんたをそこまで憤らせる訳を聞いても？」

「白を切るな。俺の後輩の弟がお前にデッキを奪われたと聞いた。それ以外にもその保護者にもカードの補填を称して金を巻き上げているともな。俺に成敗してくれといった頼みが後を絶たないんだぞ」

兄貴は人望というか問題解決の時に駆り出される。対立した意見をまとめる為にデュエルで決着する時、給食袋が盗まれた際に犯人と思われる人とデュエルして犯人か確かめたりと事欠かない。……犯人をデュエルで決めていいのか？

「あれは元々俺のカードを奪った奴等からカードを返してもらっただけだし、その時に燃やされたり破り捨てられたカードは他のカードだったり無理なら金で補填してもらっただけだ。俺は自分の権利を行使してるだけだっての」

「黙れ、奪ったカードと巻き上げた金を渡せ。母さんを通して全員に帰す」

「正義の味方気どりの兄上に良い事教えてやるよ。人の権利を蔑ろにして他に媚びるような奴は周囲から一番疎まれるんだぜ？」

「お前は他の人が恵まれているから妬んでいるだけだ。そんな事をしたってお前に待ってるのは罪悪感だけだぞ」

「お前の為を思って言ってるんだぞって大概そんな事なくて自分が気持ちよくなりた

いから大義名分が得られそうなやつを片っ端から攻撃してるだけなんだよな。ブラック企業の上司が部下を思って行動すると思うか？」

「どこまでも自分の非を認めないんだな。ならデュエルだ。お前が勝てばお前の事はもう何も言わない。だが俺が勝ったら」

「今まで取り返したカードをまた奪われろってんだろ？　お前さんってヤツはもう少し人道ってのを学んだ方が良いと思うけどな。だが、あんたには自分のものも賭けてもらう。だってあんたは何も損してないしな」

「ふざけるな！なんで俺が二つも賭けないといけない！」

「よく考えてみ？　あんた実は何も賭けてないんだぜ？　何も言わないってのはあんたが明言してるだけで俺以外誰も聞いて無い。あんたがそれを反故にしたって俺がわめくだけで他の人は知らんで通せる。ならやはり物的証拠が欲しい所だよな」

「お前は本当にそれでいいのか？そんな事をやってもまた取り返そうとデュエルし続けるだけなんだぞ」

「奪われた物は取り戻す。立ちふさがるなら叩きのめす。両方やらなくっちゃいけないのが辛い所だよな。だが、俺は既に覚悟を決めている。あんたも俺とデュエルするってなら覚悟を決めろ。生半可な奴等とのデュエルはもう飽きた。賭けるんなら真剣にやれ」

遊びでデュエルするならまず賭けない。俺は遊びでデュエルするならそれはいい事だと思うし、ガチでやるならデッキ構築からガチる。この世界ではその境界がかなり曖昧だ。アンティなんて本来やるもんじゃないし。

「で、どうするんだ？　賭けるってなら今まで俺から奪ったカード全部賭けてもらうぞ。ブラマジガールも当然賭けてもらう」

「……お、俺は」

「はぁ……もういいよ。子供に変な期待した俺が間違ってた。あんたは一生上辺だけのヒーローやってろ」

皆から頼られるとはいえ中学生。義務教育も終わっていない子供に本気なんて無理な話だったんだ。元の世界でも兄貴とは仲が悪かったからかこの兄貴に対しても風当たりが強くなるのはいかんな。

まあ、これでもう変な横槍を入れられる事は「分かった。そのデュエル受けよう」……ほんとかなぁ？

「無理しなくていいぞ。あんたからは本気の覚悟が感じられない。そんなのデュエルした後に反故にするだけだ。無駄なデュエルは遊びでやるから良いんだ。真剣な場で遊び感覚を持ってこられても困る」

「真剣だ。俺が負けたらお前が持ってたカードを返す。それで文句無いんだろ？」

「そうだな。しかし、その後に家族だからって理由でカードを毟るような事は許さない。それも条件だ」
こいつは元の世界でも家族だからって理由で買ってきたジャンプ勝手に読んで変な折り目つけてたからな。今思い出すと腹立ってきた。

証人が必要という結論になった俺達は総合体育館のデュエルスペースに来た。本当にこの世界ってデュエルに関しては事欠かないな。
「これだけいれば証人には困らないだろう。言っておくが今回のデュエルは中学生以上のルール採用でライフポイントは８０００だ。始めるぞ」
「ご随意に」
「「デュエル」」
睦月勝俊
ＶＳ
睦月大和
ＬＰ８０００

兄弟喧嘩という名の制裁デュエルが始まった。ギャラリーは兄貴の友人や後輩といった面々と俺とのデュエルで負けてデッキが無くなった馬の骨である。先攻は兄貴になった。

「俺の先攻だ。俺は〝魔道化リジョン〟を召喚。リジョンの効果で魔法使い族モンスターをアドバンス召喚出来る。魔道化リジョンをリリースして〝闇紅（ダークレッド）の魔導師（エンチャンター）〟をアドバンス召喚」

闇紅の魔導師　☆６　闇

ＡＴＫ１７００／２０００

兄貴の初動では理想の動き。ギャラリーも盛り上がりヒーローショーみたいだ。さしずめ俺は悪役だな。

「魔道化リジョンはフィールドから離れた場合デッキから魔法使い族通常モンスターを手札に加える。闇紅の魔導師の効果で召喚時に魔力カウンターを２つ置く。そしてこのカードがフィールド上に存在する限り、俺達が魔法カードを発動する度に魔力カウンターが１つ置かれる。そして魔力カウンター１つにつき攻撃力は３００アップする」

「つまり今は２３００、と」

「それだけなはず無いだろう。〝強欲で謙虚な壺〟を発動。デッキの上から３枚をめくり、その中から１枚を選んで手札に加え残りのカードはデッキに戻す。〝終焉のカウ

ントダウン〟を手札に加え、発動！」

ＯＣＧ次元の人間からすればかなり懐かしいカードがエフェクトを伴って光る。俺達を囲うように円を描く玉はゆらゆらと怪しく揺れていた。

「２０００ライフポイントを払い、これより２０ターン後、俺はデュエルに勝利する。闇紅の魔導師の効果で合計の魔力カウンターは４つ。カードを１枚伏せてターンエンドだ」

大和

ＬＰ８０００→６０００

闇紅の魔導師は自身の効果で攻撃力２９００となった。なんか涙ぐましい努力ってみると微笑ましいな。これだけやっても妨害札があのセットカードくらいしか無いのが確定してるんだ。手札誘発なんてこの兄貴は持っていない。この世界の俺も持ってなかった。

「俺のターン。まずは永続魔法〟憑依覚醒〟を発動」

「憑依覚醒？　そんなカードお前は持っていなかったはずだ」

「いいや。ちゃんと持ってたさ。このデッキは俺個人としてはかなり気に入ってるんでね。続けるぞ。〟妖精伝姫（フェアリーテイル）―カグヤ〟を召喚。カグヤの召喚成功時にチェーンして憑依覚醒の効果。自分フィールドに元々の攻撃力が１８５０のモンスターが召喚・特殊

召喚された場合、デッキから1枚ドロー。カグヤの効果でデッキから攻撃力１８５０の魔法使い族を手札に加える。フィールド魔法〝魔法族の里〟を発動。カードを３枚伏せてターンエンド」

終焉のカウントダウンの二つ目の玉が燃える。静かなスタートとなったこのデュエルは観客には些かつまらないと感じているようだが、俺には関係無い。

「俺のターン。魔法族の里はお前のフィールドに魔法使い族がいれば俺の魔法カードの発動を封じ、逆に魔法使い族がいなければお前は魔法カードが使えなくなるカード。そんなピーキーなカードを使って俺を舐めてるのか？」

「そう言うなら動けばいい。今俺のフィールドには攻撃力１８５０のカグヤしかいない。まあ憑依覚醒の効果で攻撃力は３００上がってるけどね」

「つまり２１５０というわけか。しかし闇紅の魔導師には敵わない。そしてお前は自分のカードによって首を絞める事になるんだ。魔導戦士ブレイカーの効果発動。魔力カウンターを取り除き、魔法・罠カードを1枚破壊する。伏せカードを破壊」

「バックを破壊して戦闘を確実に通したいんだろうけどそう上手くはいかない。チェーンして伏せカード発動、〝憑依連携〟。これにより守備力１５００の魔法使い族1体を手札・墓地から特殊召喚する。〝憑依装着―ウィン〟を攻撃表示で特殊召喚。更に自分フィールドのモンスターの属性が2種類以上存在すれば更にカードを1枚対象

に破壊する。闇紅の魔導師を破壊だ」

「何だと!?」

これでフィールド支配率は逆転した。まああの程度で優勢もへったくれも無いが、闇紅の魔導師が破壊された事によって兄貴のモンスターはブレイカーだけとなり、憑依覚醒によって1枚ドローして手札も回復出来た。そして相手はまだ魔法を発動出来ない。

「少し悠長だぜ。攻撃反応系と読んだんだろうけどそれじゃあ俺は狩れない。もっと慎重に、もっと苛烈にいかないと」

「くっ……ターンエンドだ」

カウントダウンが進む。まあ17ターンも待つ気なんて無いし、なんならこのターンで決める腹積もりだ。できたらいいな。

「俺のターン。〝デーモン・イーター〟を特殊召喚。こいつは自分フィールドに魔法使い族がいれば特殊召喚出来る。デーモン・イーターとカグヤを墓地へ送り、デッキから〝憑依覚醒―デーモン・リーパー〟を特殊召喚」

「デッキから特殊召喚だと!」

「まあある話だろ。デーモン・リーパーにはまだ効果がある。こいつ自身の効果で特殊召喚に成功した時、墓地のレベル4以下のモンスターを効果を無効にして特殊召喚出来る。カグヤを特殊召喚。そして憑依覚醒で1枚ドロー。〝憑依装着―アウス〟を召

喚。２枚目の憑依覚醒を発動。これにより更に攻撃力アップだ」

憑依装着―アウス

ＡＴＫ１８５０→３６５０

憑依装着―ウィン

ＡＴＫ１８５０→３６５０

憑依覚醒―デーモン・リーパー

ＡＴＫ２０００→３８００

妖精伝姫―カグヤ

ＡＴＫ１８５０→３６５０

「そんな……全モンスターが３０００以上の攻撃力だと……」

「伏せていた速攻魔法〝精霊術の使い手〟発動。手札１枚を捨ててデッキから〝霊使い〟、〝憑依装着〟モンスター、〝憑依〟魔法・罠カードの内、同名１枚までで２枚を選び１枚を手札に加え、１枚を自分フィールドにセットする。１枚を魔法・罠ゾーンにセットして１枚を手札に。さあお膳立てはこれくらいかな。バトルだ！」

「伏せ（リバース）カードオープン！〝威嚇する咆哮〟！これでバトルフェイズをスキップする！」

「カウンター罠〝神の摂理〟。相手の発動したカードと同じ種類のカードを手札から

捨てて発動。その発動を無効にして破壊する」
「そんな……俺が……負ける……」
「まあそう言う事だ。バトルフェイズ！アウスとウィンでダイレクトアタック!!」
大和
ＬＰ６０００→２３５０→０
「うぉおおおおおああああああああああ!!」
「これも真剣勝負なんでね。悪く思うなよ」
これでまた一つ決着が付いた。後一人、あいつを倒す事で俺は解放される。

# 決別する為のデュエル

兄貴とのデュエル後、俺に謝罪したいという同級生は増えた。俺に力づくで奪われる（まあ俺は取り返してるだけなんだけど）事を避ける為に自分からカードを差し出しに来たケースが多い。なら最初からやるなって話なんだけど。

「明後日にはもうここにいないんだよな」

クラスの窓から外を眺める。グラウンドには無邪気にデュエルしている低学年が見えた。低レベルのバニラモンスターで勝った負けた。時に上級モンスターを出して逆転、そこにカウンターを決めて更に逆転。この世界ではなんてことの無い風景。

俺にはもう望めない。気心知れた仲間とのデュエル。

「……帰るか」

鞄を背負って、俺は校舎を後にした。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

家に着いた俺を待っていたのは、俺が最後に決着を付けなければいけない相手。この世界の俺が死に向かう切っ掛けとなった人物。

……二つの世界で、俺が想い続けていた女。

「なんでいる。陽菜」

「勝俊……」

元の世界でも俺と陽菜は幼馴染で、家族ぐるみの仲だった。学校の友人からはラブコメの主人公かよって笑われたけど、最初はそいつらを鼻で笑っていた。そんな事実際にある訳無いって。でも、中学に上がってから環境は変わった。第二次性徴を迎えた俺達は恋愛に興味無いふりをして幼馴染であり続けた。

でも、高校で陽菜が告白されたっていう話を聞いた時、俺は頭が真っ白になった。陽菜は振ったと言っていたが、俺の心は穏やかじゃ無かった。それからは陽菜とどう接すればいいか分からなくなり、疎遠になってしまった。その中での事故死、そして転生だった。今思えば、陽菜には悪い事をしたと思う。もう謝る事は出来ないけど、幸せになって欲しいと思う。

だがこの女は別だ。ある日を境にこの世界の俺に掌を返し、篠田をはじめとしたいじ

めグループと一緒になってこの世界の俺のカードを奪い、死に陥れた！この世界の陽菜と元の世界の陽菜とは別人だ。
「まあ丁度良かった。俺とデュエルしろ」
「……やっぱり、私もなんだね」
「お前は最後に倒すって決めていた。この町でのケジメは、お前とのデュエルで決着する」
「……いいよ。でもゴメン、今はデッキもデュエルディスクも無いから今から一時間後にあの公園に来て」
「いいだろう。だが、その前に一つ聞かせろ。なんで俺の家にいたんだ」
「それも一時間後に教える。だから待ってて」
そう言い残し、俺の家を後にした。俺も自宅に入り、デュエルの為のデッキを選ぶ。
「ブラマジでもいいが、流石に対策しないはずも無いか」
でも、このデュエルは俺の一つの決着。デュエリストとして、この世界に生を受けた一人として、この町で起きた悲劇に終止符を打たなければいけない。
「なら、このデッキが相応しいな」
元の世界でも俺と共にあり続けたデッキ。このデッキが、俺を導いてくれると信じて俺は自宅を出た。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「……お待たせ、勝俊」

「正直来ないものだと思ってたぜ。まあそれでもよかったのかもな」

「どういう事？」

「お前とデュエルする事、それに何の価値がある？　本来必要無いデュエル。だが、俺は決着する事を望んだ。これは俺の最後の慈悲なんだよ」

「最後の……慈悲……？」

学校側には俺の転校は伝えてあるが、陽菜達には伝えていない。ケジメを付けるのにガン逃げされたら敵わないからだ。

「俺は明後日この町を出る。そしてもう戻る気は無い」

「嘘……嘘だよね？　そんな事、勝俊が出ていくなんて嘘だよ」

「なんでここで嘘をつく必要がある？　それより、お前も俺に聞きたい事があるんだろ？」

「あっ……」

陽菜は俺の態度に困惑した姿を見せるが、やがて決心したように呟く。

「あなたは、誰なの？」

「……何度も言わせるな。俺は睦月勝俊だ」

「嘘、あんたは私の知ってる勝俊じゃない。勝俊をどこにやったの！」
勘が良いのはこっちの陽菜も同じか。……教えてもいいのだろうか。俺の信じられる陽菜じゃないのに。
「何とか言いなさいよ。勝俊を返して！」
「なぁ、仮に俺が勝俊じゃないとして、それに何の問題がある？」
「っ！」
「俺は間違いなく睦月勝俊だ。そんな俺をお前は別人だと言う。お前のその戯言をいったい誰が信じる？　精々があの時に記憶喪失になったって考えるだろうさ。あまりのショックに……ってな」
俺の言い分に陽菜は歯ぎしりしながら睨みつける。だがそんな事どうでもいい。
「それにお前はもう俺との縁を切っただろ。俺が目の前でカードを破かれた時、お前笑ってたもんな」
「ち、ちがっ！」
「しかもあの時お前が真っ先に破らせたカード、何だったか覚えてるか？」
「真っ先に……破らせたカード？」
「まあ覚えてるわけも無いか。

〝バスター・ブレイダー〟だよ」

首にかけているカードケースを開き破られたバスター・ブレイダーを見せる。この世界の俺のエースモンスターで、俺も小さい頃よくデッキに入れていた。病院からの帰宅後、破られているカードでも残っていないかと部屋を探していたらベッドの下から見つけたのだ。他のカードは病院に置かれていたエルフの剣士しか無かった所からこの世界の俺は破かれてもなお、このカードを守りたかったんだろう。

「このカードが俺にとってどれだけ大切なカードだったのか、お前だって理解していたはずだ。レアリティとか、価値とか、そんな理由じゃない。手に入れた経緯を知ってるお前ならこのカードは奪わないと思っていたんだけどな」

「な、何よ。私が悪いって言うの!?」

「逆にお前以外に誰がいる？　篠田ならバスター・ブレイダーはレアカード、奪っていくのが目に見える。それをしなかったのはお前の差し金だから。だろ？」

陽菜は俺から目を背ける。まあ図星だったんだろうが、陽菜は口では認めないと言うんだろうさ。

「まあもうそれはどうでも……よくはないが、それの決着を付ける為のデュエルだ。さあ構えろ」

「……これで私が勝ったら、私を許してくれる？」
「いいだろう。だが、まずお前は俺に勝てない」
「……勝つもん。絶対に勝つ！」
「デュエル！」
睦月勝俊
ＶＳ
園田陽菜
ＬＰ４０００
「先攻はくれてやる。さあ来い」
「私のターン！　私は〝ホルスの黒炎竜　ＬＶ４〟を召喚！」
陽菜のフィールドにＯＣＧでも一時期〝お触れホルス〟〝フロフレホルス〟として有名になったモンスターの進化前ともいえるモンスターが現れる。最終進化は強力だが、進化前の効果はコントロール変化が出来ないだけで、ＬＶ６でも魔法カードの効果を受けないだけ。どこかのタイミングで間違いなく〝レベルアップ！〟を使ってくる。まあそれで構わない。寧ろやってもらわないと困る。
「更に魔法カード〝レベルアップ！〟を発動！これでホルスの黒炎竜は進化する！」
「チェーンして手札の〝増殖するＧ〟を墓地へ送って効果発動！」

「い、いやあああああ!!」

自然のある公園、その陰に潜むように俺達に視線が刺さる。決して表には出てこないが名称からお察しだ。

「な、なんでそんなカード使ってるのよ!」

「強いだろこれ。特殊召喚を多用するデッキ相手にするならまず三積みするぞ」

「だからってそんなキモイカード使わないでよ!」

陽菜の心無い台詞に陰に隠れている彼らが凹んだように感じた。まあ、許してくれ。

「と、兎に角効果処理!進化しなさい〝ホルスの黒炎竜　ＬＶ６〟！」

「増殖するＧの効果だ。相手が特殊召喚する度に１枚、デッキからドローする」

「１枚ドローしたところで……私はカードを２枚伏せてターンエンド」

二枚目のレベルアップ!は無かったようで初手封殺は決まらなかった。伏せが何かだが、この世界の俺は何度も陽菜とデュエルしている。セットするであろうカードは既に読めている。

そして今回、それら全てを乗り越える。

「俺のターン、モンスターをセット。魔法カード〝調律〟発動。デッキから〝シンクロン〟チューナーを手札に加えてデッキトップを墓地へ送る。もう一枚発動し、同じくデッキトップを墓地へ。〝増援〟発動。デッキからレベル４以下を手札に加える。こ

れでターンエンドだ」
「え？　たったそれだけ？　デッキからモンスターを手札に加えたのに？」
「聞こえなかったのか？　お前のターンだ」
「馬鹿にして……私のターン！ホルスの黒炎竜で裏守備モンスターを攻撃！」
裏守備モンスター→チューニング・サポーター
「攻撃力１００？　私の事を舐めてるの!?」
「それをお前に言う必要は無い。はやくターンを進めろ」
「くっ……私はこのままエンドフェイズ。ホルスの黒炎竜はこの瞬間、ＬＶ８に進化する！」
黒炎を吹かせ、ホルスは更なる進化を果たす。これで俺は魔法カードを使えなくなった。しかしそんな問題は前提条件、ＯＣＧならあって当然の妨害。
「悪いがその程度、何度も食らって来たぜ。俺のターン！」
ケジメだ決着だと言っているが、俺は本当はこの世界が憎いんだろう。この世界の俺はいうなればこの世界に殺された。それに対する憎しみ。それを今までアンティルールという形で晴らしてきた。考えてみればカード達には悪い事したよな。でもそれもこれが最後だから、もう少し付き合ってくれ。
「手札の〝ジャンク・コンバーター〟と手札のチューナーモンスター〝ジェット・シン

クロン〟を墓地へ送って効果発動。デッキから〝シンクロン〟を手札に加える。〝ジャンク・シンクロン〟を手札に加え、そのまま召喚！ジャンク・シンクロンの効果発動だ。召喚成功時、自分の墓地のレベル2以下のモンスターを効果を無効にして守備表示で特殊召喚出来る。ジャンク・コンバーターを特殊召喚」

「チューナーモンスター……という事はシンクロ召喚！」

「察しが良いな。だがまだだ。手札の〝ドッペル・ウォリアー〟は自分、または相手の墓地から自分フィールドにモンスターが特殊召喚に成功した時、自身を特殊召喚出来る。守備表示で特殊召喚！」

「レベル7……それはさせられない！伏せカード〝姑息な落とし穴〟！相手が守備表示でモンスターを特殊召喚した時、その守備モンスターを除外する！」

「これでドッペル・ウォリアーは除外されるが、シンクロの素材は揃った。レベル2のジャンク・コンバーターにレベル3、ジャンク・シンクロンをチューニング！〝ジャンク・スピーダー〟をエクストラモンスターゾーンにシンクロ召喚！

ジャンク・スピーダーの召喚時効果にチェーンしてジャンク・コンバーターの効果発動！シンクロ素材として墓地へ送られた場合、墓地のチューナーモンスターであるジャンク・シンクロンを特殊召喚する。そしてジャンク・スピーダーの効果はデッキからレベルの異なる〝シンクロン〟チューナーを可能な限り特殊召喚する。レベル1〝

ジェット・シンクロン〟、レベル２〝サテライト・シンクロン〟、レベル３〝ジャンク・シンクロン〟、レベル４〝スターダスト・シンクロン〟を特殊召喚！」

これで俺のフィールドにはモンスターが六体にまで増えた。内五体がチューナーだが、必要なものは足りてる。

「スターダスト・シンクロンは召喚、特殊召喚に成功した場合、デッキから〝スターダスト・ドラゴン〟がテキストに書かれた魔法・罠カードを手札に加える。レベル５のジャンク・スピーダーにレベル１のジェット・シンクロンをチューニング！〝スターダスト・チャージ・ウォリアー〟！

スターダスト・チャージ・ウォリアーの効果でデッキから１枚ドロー。レベル６スターダスト・チャージ・ウォリアーにレベル４のスターダスト・シンクロンをチューニング！シンクロ召喚〝サテライト・ウォリアー〟!!」

特に妨害も無く半ば理想的な流れでサテライト・ウォリアーを召喚出来た。陽菜の伏せカードは基本的に戦闘を妨害するカードが多い。召喚の妨害はあって〝激流葬〟やさっき発動した〝姑息な落とし穴〟程度。それもピン差しだからもう一枚が激流葬なんて確立はかなり低い。なんならあのデッキは罠カードを普通より多めに入れているという小学生特有のカウンターデッキだ。そしてそのデッキの弱点は展開が遅い点とバックが割れたら防御不可って事か。

「サテライト・ウォリアーの効果発動。シンクロ召喚に成功した場合、墓地のシンクロモンスターの数まで相手フィールドのカードを対象に破壊する。俺の墓地には2体。丁度ホルスの黒炎竜と伏せカードがあるな」

「つー・り、伏せ(リバース)カードオープン！〝スケープ・ゴート〟！羊トークンを4体特殊召喚する！」

流石にこれは躱してきた。ホルスの黒炎竜が破壊される事に変わりは無いが、壁モンスターが一気に4体。成長したと言うべきなんだろうな。

「サテライト・ウォリアーは自身の効果で破壊した枚数につき1000アップする。壁を並ても、俺には通じない。フィールド魔法〝スターライト・ジャンクション〟を発動。俺のフィールドに存在するチューナーモンスターであるジャンク・シンクロンをリリースしてデッキからレベルの異なる〝シンクロン〟を特殊召喚する。〝シンクロン・キャリアー〟を特殊召喚。シンクロン・キャリアーはフィールドに存在する限り、通常召喚に加えて〝シンクロン〟を召喚出来る。ジャンク・シンクロンを召喚」

「どれだけジャンク・シンクロン出てくるのよ……」

使いやすいから仕方ない。俺のデッキの過労死枠だからじゃんじゃん使わせてもらう。

「ジャンク・シンクロンの効果は名称ターン1指定は無い。墓地のチューニング・サ

ポーターを特殊召喚。レベル2のシンクロン・キャリアーにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング。〝TG　ハイパー・ライブラリアン〟をシンクロ召喚。

手札1枚を墓地へ送って墓地のジェット・シンクロンの効果を発動。自身を特殊召喚する。レベル1のチューニング・サポーターにレベル1のジェット・シンクロンをチューニング。シンクロチューナー〝フォーミュラ・シンクロン〟をシンクロ召喚。

フォーミュラ・シンクロンにチェーンしてハイパー・ライブラリアン、更にチューニング・サポーターの効果を発動。チューニング・サポーターはシンクロ素材として墓地に送られたら1枚ドロー。ハイパー・ライブラリアンはシンクロ召喚に成功する度に1枚ドロー。フォーミュラ・シンクロンはシンクロ召喚に成功したら1枚ドロー。合計3枚だな」

「手札がもう最初の枚数まで回復した……」

「まだ俺のデッキは止まらない。墓地の〝ボルト・ヘッジホッグ〟の効果発動。自分フィールドにチューナーモンスターが存在する場合、自身を墓地から特殊召喚出来る。サテライト・シンクロンの効果発動。レベル2のボルト・ヘッジホッグにレベル2のサテライト・シンクロンをチューニング。〝アームズ・エイド〟をシンクロ召喚。

ハイパー・ライブラリアンの効果で1枚ドロー。レベル4のアームズ・エイドにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング。シンクロチューナー〝シューティング・

ライザー・ドラゴン〃をシンクロ召喚。ハイパー・ライブラリアンの効果で1枚ドロー」

「手札が……全然減らない……」

「まだ俺のメインフェイズは終了していない。永続魔法〃光来する奇跡〃。発動処理として手札・デッキからレベル1・ドラゴン族モンスターをデッキの一番上に置く。そして手札の〃ブースト・ウォリアー〃の効果発動。自分フィールドにチューナーモンスターが存在すれば特殊召喚出来る。レベル7のシューティング・ライザー・ドラゴンにレベル1ブースト・ウォリアーをチューニング。シンクロ召喚〃スターダスト・ドラゴン〃」

これが俺が愛用し続けたモンスター。やっぱりシンクロは最高だ。こうしてソリッドビジョンで見られる事は感謝してもしきれないな。

「……綺麗」

「まだ終わらない。ハイパー・ライブラリアンの効果で1枚ドロー。そしてドローしたカードは光来する奇跡で置いた〃想い集いし竜〃。こいつをドローした時、相手に見せる事で手札から特殊召喚出来る。更に自分フィールドにレベル8以上のドラゴン族が存在するなら更にデッキからレベル1のドラゴン族を特殊召喚出来る。〃スターダスト・シャオロン〃を特殊召喚。レベル8シンクロモンスタースターダスト・ドラゴンとレベル1スターダスト・シャオロンにレベル1想い集いし竜をチューニング！シンク

ロ召喚〝セイヴァー・スター・ドラゴン〟!!」

ＯＣＧ次元では長い事日の目を浴びなかった定時退社竜。しかし十年という長い月日は、彼にワンキル出来るだけのポテンシャルを与えたのだ！（ナレーション風）

「ハイパー・ライブラリアンの効果にチェーンして光来する奇跡の効果発動。シンクロモンスターを特殊召喚した場合、デッキから1枚ドローするか手札のチューナーモンスターを特殊召喚出来る。ドロー効果を選択。そしてハイパー・ライブラリアンで1枚ドロー。〝ワン・フォー・ワン〟を発動。手札のモンスターを墓地へ送り、手札・デッキからレベル1のモンスター〝救世竜　セイヴァー・ドラゴン〟を特殊召喚。レベル10のセイヴァー・スター・ドラゴンにレベル1救世竜　セイヴァー・ドラゴンをチューニング！シンクロ召喚〝シューティング・セイヴァー・スター・ドラゴン〟!!」

シューティング・セイヴァー・スター・ドラゴン　☆11　風

ＡＴＫ４０００／ＤＥＦ３３００

使いたくても弱くて無理だったと歯痒い思いをした者は数多いと思う。俺もそうだったし、セイヴァー・ドラゴンはその典型といってもいい。そんなカードも長い時間を経て戦う事が出来るようになるからデュエルって止められないんだ。

「ハイパー・ライブラリアンの効果でドロー。〝セイヴァー・アブソープション〟発動。シューティング・セイヴァー・スター・ドラゴンに直接攻撃の権利を与えバトル！

シューティング・セイヴァー・スター・ドラゴンでダイレクトアタック!!」

「て、手札の〝クリボー〟を墓地へ送ってダメージを０に!」

「だがまだだ。シューティング・セイヴァー・スター・ドラゴンは通常の攻撃に加えて墓地の〝スターダスト・ドラゴン〟または〝スターダスト・ドラゴン〟が記されたシンクロモンスターの数だけ攻撃出来る。シューティング・セイヴァー・スター・ドラゴンでダイレクトアタック!!」

陽菜

ＬＰ４０００→０

決着となったデュエルは余りにもあっけなく

それが俺自身がこの世界にとって異物だという事実を突きつけた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇

デュエルが終わり、陽菜はその場にへたり込んで何も言わなくなってしまったが、俺はそれを気にせず家に帰った。

そしてそこから何事も無く二日過ぎ、俺はこの町を出た。

# 祭りは出会いの場？

父さんと引っ越してから二日経ち、すっかり記憶の彼方に消えていたデュエルフェスの日になった。あの町が田舎だったからデュエルのレベルが低かったのか、それを確かめる為、そしてレアなパックもあるらしいからそれを手に入れる事も大切だ。こちらに来てから一回しかパックを剥いてないし、何か掘り出し物があるといいな。

「勝俊、本当に大丈夫か？父さんは仕事に行くが、何かあったらすぐに電話するんだぞ？」

「大丈夫だよ父さん。そうならないように注意してるから」

「しかしそれであんな事になったんだ。心配だってする。くれぐれも無理はするな」

父さんはそれだけ言うと仕事に行った。心配してくれてるんだろうけど仕事優先だから本当はそこまでなんだろうさ。

「さーて、軍資金もたっぷりあるし、パック買って開封式だ！」

俺は喜々として物品コーナーに駆けた。

人混みの中では走らないようにしよう!勝俊との約束だぞ!

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「大方買えた。鞄もいっぱいだな」

限定のファイル、スリーブ、デッキケース、そしてパック。複数買いや予備も合わせて軍資金の六割を使ってしまった。小学生から万以上を使うって教育上よろしくない気もするが、精神的には高校生だし大丈夫……か?

「まあ後は特別デュエルを待つだけ……だが」

こういうイベントはトラブルもあるものだ。悲しいが

「へっ!こんなカードしか無いのにデュエルフェスに来るんじゃねえよ!」

「そうだそうだ!デュエルフェスはお前みたいな雑魚のイベントじゃねえんだよ!」

下品な笑いをあげて小学生の女の子のであろうカードを投げ捨てる。高校生グループだろうけどにしてもマナーも無いなんてな。

「アンティルールだ。お前の限定パックと有り金、全部寄越せ」

「そ、そんな約束……してない……」

「うるせえ!負けたんだから俺の言う通りにすればいいんだよ!」

ギャラリーも遠巻きにしか見ていない。黙らせるくらい出来るだろうに、いやー俺がやるっきゃないかー（棒）

「んぉ？なんだお前」

「邪魔だ」

「っ！おい！」

高校生をどかし、床に散らばったカードを拾って女の子に渡す。爽やか（笑）な笑顔も忘れずに。

「ほら、君のカードだろ？」

「え、えっと……」

「まあまあ、後は任せて。こういうのには慣れてるから」

慣れざるを得なかったんですけどね。高校生に向き直り、デュエルディスクを構える。

「俺とも、デュエルしてもらおうか」

「なんだとこのガキ！この俺が誰か知らないみたいだな」

「全く知らん。誰だお前は」

高校生グループは昔のアニメみたいにズッコケる。本当にこんなリアクションあるんだ。

「知らないようだから教えてやる。俺は結閃高校のエース！〝鯉登（こいと）　良治（りょうじ）〟だ！」
「エースがこんなみみっちい事してるって事は、その高校のレベルもたかが知れてるな」
間髪入れずに入れたコメントにギャラリーから笑いが吹き出す声が聞こえる。俺の考えに共感する人は多いようだ。
「て、てめえ……もうキレたぜ。そのデュエル受けてやる。泣いて謝っても遅いからな」
「ライフはそちらに合わせよう。その方がやりやすいだろ?」
「舐めやがって、後悔しやがれ！」

「「デュエル！」」
睦月勝俊
ＶＳ
鯉登良治
ＬＰ８０００
「先攻は俺が貰うぞ。俺はフィールド魔法〝炎王の孤島〟を発動！その効果で手札・フィールドのモンスター１体を破壊し、デッキから〝炎王〟モンスターを１体手札に加

える。〝炎王獣　ガネーシャ〟を手札に加え、召喚！これでターンエンドだ」
流石に高校生なだけあってシナジーも考えるか。しかも破壊したのは〝ネフティスの鳳凰神〟。次のターンには来るが、これなら問題ない。
「俺のターン、ドローしてメインフェイズ。あんたのフィールドのガネーシャをリリースして〝海亀壊獣ガメシエル〟を相手フィールドに特殊召喚！」
「何？！」
ソリットビジョンの海がガネーシャを飲み込み、亀がモチーフとなったモンスター、ガメシエルが現れた。攻撃力を上げる結果となったが、今時決着を付ける時以外攻撃力なぞ飾りでしかない。
「俺のフィールドを強固にしてくれてありがとうよ。攻撃力の計算をするのもデュエリストなんだぜ～？」
「お前のガネーシャ、面倒な効果を持ってるのは知ってるんだよ。強がりはやめろ」
鯉登は小さくだが確かに舌打ちする。どうやら図星らしいな。
「俺のターンは始まったばかりだ。〝ダイナレスラー・パンクラトプス〟を特殊召喚。このモンスターは自分フィールドのモンスターの数が相手より少ない場合、特殊召喚出来る。パンクラトプスの効果発動。〝ダイナレスラー〟を1体リリースし、相手フィールドのカード、炎王の孤島を破壊する！」

「!炎王の孤島は破壊されたら、フィールドのモンスター全てを破壊する……」
ガメシエルには申し訳ないけど、これで道は見えた。
「〝ダイノルフィア・テリジア〟を召喚。召喚時、デッキから〝ダイノルフィア〟罠カードを魔法・罠ゾーンにセットする。〝ダイノルフィア・ドメイン〟をセット。手札の〝幻創のミセラサウルス〟を墓地へ送り、魔法カード〝ワン・フォー・ワン〟を発動。デッキからレベル1の〝珠玉獣―アルゴザウルス〟を特殊召喚。アルゴザウルスの効果発動。フィールドの恐竜族モンスターであるアルゴザウルス自身を破壊し、デッキからレベルの同じ爬虫類族・海竜族・恐竜族モンスター1体、または〝進化薬〟魔法カードを手札に加える。〝究極進化薬〟を手札に加え、発動!墓地の恐竜族であるパンクラトプス、恐竜族以外のモンスターであるガメシエルを除外し、手札・デッキからレベル7以上の恐竜族モンスター〝究極伝導恐竜(アルティメットコンダクターティラノ)〟を召喚条件を無視して特殊召喚!」
究極伝導恐竜　☆10　光
ＡＴＫ３５００／ＤＥＦ３２００
「攻撃力……３５００がワンターンで!」
「バトルフェイズ!　テリジアで攻撃!」
鯉登
ＬＰ８０００→６５００

「くぅ！」
「究極伝導恐竜でダイレクトアタック！」
ＬＰ６５００→３０００
「がああああっ!!」
「カードを1枚伏せてターンエンド。さあ、あんたのターンだ」
「お、俺の……」
鯉登の手は震えてる。ここまで一方的とは思わなかったか、思っていたとしても俺が負けると考えてたんだろうな。
「全く呆れたものだ。もうギブアップかよ」
「な、なんだと！」
「戦意を失った奴と戦う気は無い。もうやめろ。サレンダーも認めてやる」
本来デュエルモンスターズにサレンダーは無いが、この世界では許されている。デッキに手を置けばそれはサレンダーのサインになる。
「……ふざけるな！そんな事、許されるものかーーー！俺のターン！このスタンバイフェイズにネフティスの鳳凰神は復活する！」
「あ、それダメ。カウンター罠〝神の通告〟を発動」
「え？」

「ライフ１５００を払って自分または相手がモンスターを特殊召喚する際にそれを無効にして破壊する。ネフティスは墓地での効果でそれを無効、墓地では破壊されないから次のあんたのスタンバイフェイズに復活しない。オーケー?」

ＬＰ８０００→６５００

「な……」

「それで、何か他にあるか?」

「……モンスターをセットして、カードを１枚伏せてターンエンド」

「ならエンドフェイズに伏せ(リバース)カード、ダイノルフィア・ドメインを発動。手札・デッキ・フィールドから〝ダイノルフィア〟融合モンスターの素材を墓地へ送り、融合召喚を行う。デッキのダイノルフィア・テリジアと〝ダイノルフィア・ディプロス〟を素材に融合召喚！〝ダイノルフィア・ケントレギナ〟!!」

ダイノルフィア・ケントレギナ　☆６　闇

ＡＴＫ４０００／ＤＥＦ０

勝俊

ＬＰ６５００→３２５０

「ここで……攻撃力４０００!?」

「しかし、ケントレギナはデメリットで俺のライフ分攻撃力を下げる。つまり今は７

５０だ」

「な、なんだよ。ビビらせやがって……」

「だが、これで俺のターン、しっかりトドメさしてやるよ。ケントレギナの効果発動！ライフを半分払い、墓地の〝ダイノルフィア〟通常罠カードを除外し、ケントレギナの効果は除外した罠カードその発動時の効果と同じになる！」

勝俊

ＬＰ３２５０→１６２５

「再びテリジアとディプロスをデッキから墓地へ送り、融合召喚！〝ダイノルフィア・ステルスベギア〟!!」

ダイノルフィア・ステルスベギア　☆６　闇

ＡＴＫ０／ＤＥＦ２５００

「こ、攻撃力０かよ。同じのが出てくると思ったけどそんな事無かったな」

「俺の目的はライフを削る事だ。これでケントレギナは２３７５。削り切るには十分だ」

「そ、そんなライフを削る事前提のデッキってなんだよ！」

本当に何なんだろうね。でもケントレギナ可愛いしいいでしょ。

「バトルフェイズ！究極伝導恐竜で裏守備モンスターに攻撃！」

伏せモンスター→炎王獣　ガネーシャ
「ガネーシャは破壊されるが、これで効果が発動「しないぞ」……は?」
「究極伝導恐竜の効果、守備モンスターを攻撃したダメージステップ開始時に発動出来る。相手に１０００ダメージ与えてその守備モンスターを墓地へ送る」
「だ、だけど破壊されるなら……」
「破壊の段階は踏まない。ただ墓地へ送るだけだ」
「そ、そんなのアリかよ……」
鯉登
ＬＰ３０００→２０００
「ケントレギナでダイレクトアタック!」
ＬＰ２０００→０
「お、俺がこんなガキにいいいいいい!!」
正に敵役のような断末魔をあげながら吹っ飛ばされる。そして俺は女の子に向き直り
「ガッチャ!!　これからは、楽しいデュエルをしようぜ!」
三本指を伸ばし、キメ顔（爆）を作って笑ってみせた。

# そんな展開聞いて無いけど取り敢えずヨシ！

「えっと……ありがとうございます」

「気にしない気にしない。俺があいつらを気に入らなかったから横槍入れただけだし、カードを粗末にする奴に碌な人間はいないからな」

助けた女の子は〝地霊使いアウス〟を幼くしたような容姿の女の子だ。デュエルに意識が向いて気づかなかったが、かなり可愛い。でも今はデュエルの結果を示さないと。

「デュエルは俺の勝ちだ。あの子の敗北は帳消し、理不尽なアンティルールも撤回してもらう」

「クッ……分かってる。すまなかった」

鯉登は女の子に向かって謝る。あいつらと比べてもマシな性格だ。

「なあ、なんであんな事やったんだ？　エースなんて言われてるんだからその面子もあるだろ」

「……イベントは強いデュエリストが多く参加する。それに勝てば俺も強いデュエリストとして認められると思ってな。まあ、弱い者いじめと化した挙句、ボコボコにされ

たんだが」
「それを認める事が出来たんなら上々だよ。次は楽しいデュエルにしようぜ」
「……ああ」
鯉登とその取り巻きは女の子に謝罪し、その場を去っていった。ギャラリーもまばらに散って俺と女の子だけになる。
「えっと……あの……」
「大丈夫だよ。それよりカードは全部ある？」
「う、うん……」
女の子のデッキを一緒に確認する。地属性で構成されたデッキのようだ。見た目のままだな。
「なら良かった。ああいう手合いはイベントには多いから気を付けてな。今回はちょっとはっちゃけただけだったけど、質悪いやつだと何されるか分からない。注意してな」
「あ、あの……」
女の子に軽く注意を促して立ち去ろうと背を向ける。……が、
「ええっと……どうしたのかな？」
「……で」

女の子に袖を掴まれ止められる。何か言いたげだけどお礼はさっき言われたよな。
「行かないで
……勝ちゃん」

「……君は、誰だ」
いや、俺の事を勝ちゃんと呼ぶのは一人。でも彼女はこの世界の住人じゃないし、顔も違う。何よりこの世界の彼女とは袂を別った。
俺の質問は既に俺の中で解を得ている。本来この質問に意味は無いが、聞かずにはいられなかった。
「そうだよね。こんなに変わっちゃったら気づくはずも無いよね……」

――陽菜だよ。勝ちゃん

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

睦月勝俊は人気者では無かったが、常に仲間が周りにいた。それが園田陽菜含めた勝俊の仲間の共通認識であった。仲間内で楽しんでいる勝俊や陽菜、その仲間は純粋に遊びを、青春を謳歌していた。

しかし、それは唐突に終わる。理由は子供の必ず通る道。思春期の第二次性徴が訪れたのだ。

勝俊と陽菜は最初は変わらず接していたが、周囲の冷やかしや心無い言葉が勝俊と陽菜の距離を開ける事となった。時には噂話に流され、相手を蔑む言葉を放つまでになる。

だが、本当は互いに思い合っていた間柄であり、蔑む言葉など使いたくは無かったのだ。勝俊も陽菜も周囲に飲まれ、それは高校に入っても同様だった。しかし、互いに話しかける事も無くなった為、まだマシになったのかもしれない。

その瞬間が訪れるまでは。

「陽菜……勝俊君が、亡くなったって……」

母親から勝俊の訃報を聞いた陽菜は最初、勝俊が仕掛けた仲直りのドッキリだと思った。輪の中心にいた勝俊は祝い事になると盛大にやると自作の料理を振舞っていた。葬式の真似事をしている間に仲直りの料理を振舞うのだろうと陽菜はそのドッキリに乗る事にした。勝俊が赤面しながら謝罪の言葉を述べるのを半ば楽しみにしていた。

しかし、現実は非情に陽菜へ結末を突きつけた。通夜、葬式と滞りなく進み、火葬場に運ぶ事になってから母親にドッキリでは無いのかと聞くが

「何言ってるの！こんな状況がドッキリだと思ってたの!? 勝俊君と仲違いしたって聞いてたけど勝俊君が嫌がらせでこんな事するわけ無いってあんたが一番分かってるはずじゃない!!」

次の瞬間、陽菜は地面との距離が不確かになり、いつの間にか地面に倒れていた。母の声は遠のき、意識が闇に落ちた。

意識の無くなった後も陽菜は夢という形で現実を突きつけられていた。自分と勝俊が仲違いした後から自身がしてきた陰口や無視、それらへの恨み節が勝俊の声となって

陽菜を責め立てる。

「いや……やめて勝俊……ごめんなさい……そんなつもりじゃなかったの……勝ちゃん……」

更に意識は闇に落ちる。自責の念からか、想い人が消えた故か、夢の中というのに陽菜の意識は

消滅した。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「……さん……なさん……」

「陽菜さん!!」
「ひゃあああ!!!」
沈んだ意識を叩き起こすような声に飛び起きる。目が覚めたそこは全てが白で染まった部屋であった。自分は死んだのかと感じたがその前に目の前の女性が答える。
「ここは〝転生の部屋〟死した者、生きる望みを無くした者を新たな世界に送る場所。園田陽菜さん、愛する人を失い生きる望みを無くしたあなたへ二つの選択を与えます。一つは新たな世界で生きる道を、もう一つは元の世界で今まで通り生きる道を」
「あなたは……いったい誰なの?」
「私はただの案内人。名前はありません。今まで案内してきた人も〝女神様〟と言ってくれていましたが、固有名詞はありません」
「そ、そうなの……」
現実離れした出来事に思考がショートしそうになる。しかし、他にも案内してきたという事はその可能性がある。陽菜は勇気を持って案内人に聞く。
「勝ちゃんは、睦月勝俊はあなたが案内してきた人の中にいますか!」
「む、睦月勝俊……!」
案内人は思いつめたように目を見開く。間違いなく勝俊を知っていると確信を持った陽菜は意を決して問いただす。

「教えて。彼を知ってるんですよね？　私はどうしても勝ちゃんに会わないといけないんです！」
「……あまり気持ちのいい話ではありませんよ？」
「それでも構いません。教えてください」

「こうして現在、彼はあの世界のあなたをデュエルで倒し、故郷を去らんとしています。これで全てです。納得されましたか？」
「はい……でも……」
案内人からされた話は前以って注意されていたが、内容ははっきり言って最悪と呼べるものだった。勝俊の転生した世界の自分は人を使って勝俊を死の寸前に追い込み、生きる望みを絶たせたのなら、元の世界も含めて勝俊に会わせる顔が無い。
「この世界に転生するのは難しい事ではありません。しかし、転生に際して特典があるのですが」
「その特典で勝俊と会える人に転生は出来ますか！」

「で、出来ますが……あの世界なら自分の所持しているデッキを持ち込む方が」
「デュエルをやってこなかったので大丈夫です！お願いします！」
「……分かりました。では……彼女にしましょう。彼を出会うまで肩身が狭いと思いますが、少しの辛抱ですので」
「ありがとうございます。でも、彼女って？」
「あなたがこれから転生する子も生きる望みを失ってしまい、転生を望んだ子です。彼女の記憶を引き継ぎますか？」
「はい、お願いします」
案内人は頷くと、詠唱を唱え転生の魔法陣を展開させる。その際、案内人が言葉を挟む。
「勝俊さんと出会えるのは三日後です。そして平行同位体では無いので肉体に精神が引っ張られる可能性があります。名前を間違えないようにお気を付けて」
「何から何までありがとうございます。あの世界で私がすべき事って何かあるんですか？」
「いいえ。強いていうなら、彼の助けになってあげてください。彼は、あの世界の自分の宿命も背負っています。時に歩みを止めてしまうかもしれません。その時は、あなたが助けてあげてください」

「勝ちゃんの……助けに……はい！」
決意を新たに、陽菜は生まれ変わる。そこに不安など微塵も無く、勝俊と再び歩む未来へ飛び込んだ。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「それで、転生した身体が

コミュ障、地味系、デュエルオタクのアウス女子ってわけか」
「そ、それを言われると……何も言えません……」
陽菜の回想シーンの話を終えてから身もふたもない台詞だが、それを聞いて陽菜は赤面しながら俯いてしまった。しかし俺が死んでからそんな事になっていたなんて
「すまん、俺が意固地にならずにいれば……」
「しょ、勝ちゃんが悪いんじゃないよ！元はと言えば私が勝ちゃんを皆と嗤ったからで……私は、勝ちゃんといる資格なんて本当は無いの……でも、謝りたかった……」
「いや、俺が甲斐性を見せていれば」

「いいえ私が勝ちゃんの味方でいれば」
「いや俺が……」
「いいえ私が……」
そのまま水掛け論で自分が悪いと言い続けるが、暖簾に腕押しといったように結論がつかない。
「じゃ、じゃあ」
「お互い様と、いうことで……」
「そうだな。はは……」
「ふふ……」
俺達が元の世界に残してきた蟠り、それを溶かすように笑いあった。これがずっと続くように、如何なる時も離れる事が無いように願いながら。今度は守る、あの約束を。

# 強いヤツが俺を待っている！……はずじゃないのか!?

陽菜と謝罪合戦を終わらせた後、大事な事を聞き忘れていた。
「そういえば、この世界の陽菜の名前って何なんだ？」
「そういえば言ってなかったね。改めて、〝石木（いしき）　秋奈（あきな）〟です。これからもよろしく……ね？」
「ああ、改めて睦月勝俊だ。よろしくな」
右手を差し出し、陽菜もとい秋奈も手を差し出す。固く握る秋奈の手は、少し震えていた。お互い様といっても、後ろめたいと思っているんだろう。
「心配するなって。陽菜が悪いと思ってるなら、俺は許すよ」
「うん……ありがとう」
目を伏せながらだが、陽菜も納得させたようだ。俺は笑う事で反応を返す。
「さて、話も終わったし、ここからはお楽しみのパック開封だ！」
「……勝ちゃんは昔と変わらないね」
デュエルに関しても少し飽きたりと浮き沈みがあるって自覚してるんだけどな。ともあれデュエルが好きなのは昔から変わらない。そういう意味では陽菜の言う通りか

もな。

俺の鞄から今日買ったパック全てをテーブルに広げる。限定パックの他に通常弾もいくつか買ってるけどあまり期待できない。それには一つの大きな理由がある。

まず、今までのデュエルで気になった事があるはずだ。十一期までのカードプールがあるのに、主要カードが三、四期程のカードパワーしかない事の違和感。確かに当時のカードプールでもワンキルを組むまでのパワーがあったが、彼らは持っていなかった。持っていてもそれらを組み合わせていなかった。攻撃力の高いモンスターを入れてのビートダウン、しかもモンスターは各ピン差しという不安定さ。それらはこの世界に転生した後に最初に買ったパックの結果が教えてくれていた。

金額……変化なし。税金が安い分割安

封入枚数……基本五枚、特殊パックなら四枚とか十枚とか

封入内容……今まで収録されてきたカード全部

そう、例えば八十種類新しいカードが発売されたら今までのカード＋新しいカードが

収録された新パックが発売され、闇鍋待ったなしの元の世界じゃえぐすぎてサ終待ったなしのカスパックの完成だ。レアカードの入手何度は軒並み上がり、シングルの相場も青天井で上がり続ける。当然それをユーザーもといデュエリストが納得いくはずも無い。その救済措置として今回のデュエルフェスの特別パックやテーマや相性の良いカードをまとめたコンセプトパックが多少割高で販売されている。因みに高いと一パック五百円いくぞ!

そしてデュエルフェスの特別パックはその中でも収録内容が豪華という触れ込みで有名だ。とはいってもブラッド・ヴォルスやアレキサンドライドラゴンといった低級ビートに用いるカードが多いが、新弾に収録予定のカードが入っているとなれば買わない手は無い。水属性やアルバスは気になってたんだ。

「さて、運命の一パック目……」

秋奈と一緒にパックの封を切る。特別パックの内容は

アルバスの落胤
モリンフェン
覚醒
潜海奇襲Ⅱ（シーステルスツー）

落胤竜アルビオン（ウルトラ）

かなり勝ちだな。アルビオンはデッキを組んでなかったから持ち込めなかったし、アルバスも嬉しい。スーレアかウルトラが確定だったっけ？　モリンフェンは謎。

しかし、まだまだパックは残ってる。でもイベントもあるし開封は後にすればよかったかなって思う。

「勝ちゃん、もうすぐイベント始まるらしいけど参加するの？」

「当然参加だ。デュエルが出来るのに行かない手は無いぜ。開封後にやればよかったな」

「でも良いカードが出たんでしょ？　ここで開けたから出たって考えたら、悪くは無かったんじゃない？」

そう考える事も出来るか。取り敢えず出たカードはスリーブに入れておく。どれが使うか分からないしな。

「よし、じゃあデュエルイベントの会場に行こうぜ。はやくデュエルしたくてウズウズしてるんだ」

「うん、私は参加しないけど頑張ってね」

「え？　参加しないのか？」

「まだルールがよく分かってないから。勝ちゃんのデュエルで勉強するよ」

俺のデュエルがルール覚えるのに適してるか分からないけど、秋奈がそう言うならそれでもいいか。

さて、多少はマシなデュエリストがいる事を祈っているぜ！

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「そう思っていた時期が俺にもありました……と」

「げ、元気だして！私もはやくルールを覚えて勝ちゃんと戦えるくらい強くなるから」

デュエルを十回程終えた感想ははっきり言って満足出来ないものだった。速度が遅いデッキもいくつか使っているが、それでもインフレの波に揉まれたデッキコンセプトはグッドスタッフにもならない寄せ集めまがいのデッキ相手にまず負けない。いくつかデュエルを思いだすが

「俺のフィールドには〝正統なる血統〟で特殊召喚した〝エメラルド・ドラゴン〟がいる。お前が〝サイバー・ドラゴン〟を使うのには驚いたが、これで終わりだ！」

「手札の〝サイバー・ダーク・キメラ〟を墓地へ送り、〝サイバー・ドラゴン・ネクス

テア〟を特殊召喚。そして特殊に成功した場合に発動する効果で、墓地の〝サイバー・ダーク・キメラ〟を特殊召喚。手札の魔法・罠カードを墓地へ送り、キメラの効果発動。デッキから〝パワー・ボンド〟を手札に加える。〝サイバー・ドラゴン・コア〟を召喚し、その効果でデッキから〝サイバー〟か〝サイバネティック〟魔法・罠カード〝サイバーロード・フュージョン〟を手札に加える。魔法カード、パワー・ボンド発動!」

「パワー・ボンドだと!?　でも素材となるモンスターはサイバー・ドラゴン・ネクステアとサイバー・ドラゴン・コア……サイバー・エンド・ドラゴンには届かないぞ!」

「ご心配なく。サイバー・ダーク・キメラがパワー・ボンドをサーチした後、融合召喚する場合の素材を墓地から除外する事で素材に出来る」

「何だと!?」

「フィールドで〝サイバー・ドラゴン〟として扱うサイバー・ドラゴン・ネクステアとサイバー・ドラゴン・コア、墓地のサイバー・ドラゴンを除外し融合! いでよ、〝サイバー・エンド・ドラゴン〟!!」

サイバー・エンド・ドラゴン　☆１０　光

ＡＴＫ４０００／ＤＥＦ２８００

「攻撃力４０００……パワー・ボンドで攻撃力が８０００まで上がる……でもこのターンは凌げる。次のターン俺が効果で破壊出来るカードを引けば……」

「悪いが次のターンは無い」
「何……？」
「忘れたか？　サイバーロード・フュージョン」
「それは、コアの効果で手札に加えたカード……」
「こいつはフィールドと除外されているモンスターを素材とする。お前がエメラルド・ドラゴンでサイバー・ドラゴンを破壊した時発動していたな。〝異次元グランド〟」
「そ、それは……」
「除外されているサイバー・ドラゴン２体をデッキに戻し、融合召喚！〝キメラテック・ランページ・ドラゴン〟!!」
キメラテック・ランページ・ドラゴン　☆５　光
ＡＴＫ２１００／ＤＥＦ１６００
「また新しい融合モンスター！……でも攻撃力はエメラルド・ドラゴンより下だ。サイバー・エンド・ドラゴンの攻撃を防げば」
「キメラテック・ランページの効果、融合召喚に成功した時、素材としたモンスターの数までフィールドの魔法・罠カードを破壊する。伏せ（リバース）カード２枚を破壊」
「そ、そんな！」
「バトルフェイズだ。サイバー・エンド・ドラゴンでエメラルド・ドラゴンを攻撃！」

「う、うわあああああああああああああああ!!」

「僕は〝ツインテール〟を召喚。これでターンエンド」

「俺のターン。魔法カード〝強欲で貪欲な壺〟を発動。デッキから１０枚のカードを裏側で除外して２枚ドロー。エクストラデッキ１５枚を裏側で除外して〝百万喰らいのグラットン〟を特殊召喚。デッキから８枚を除外して〝機巧蛇―叢雲遠呂智（ムラクモノオロチ）〟を特殊召喚。そして〝紅蓮魔獣　ダ・イーザ〟を召喚」

「い、一気に三体のモンスター……でも攻撃力２０００以上のモンスターは叢雲遠呂智だけ?」

「グラットンの攻撃力は裏側で除外されているカード一枚につき１００ポイント、ダ・イーザの攻撃力は除外されている俺のカード一枚につき４００ポイントとなる。除外されているカードは全て裏で除外されている。その枚数は三十三枚」

「攻撃力３３００と……えっと……」

「１３２００だ」

「い、いちまん!?」

「ダ・イーザでツインテールを攻撃!」

「そ、そんなああああああああああ！」

良くて上級モンスターを召喚権を消費せず出すだけ。酷い時は小型モンスターを攻撃表示で出すだけでターンエンドする始末。アニメでもそんな事してるモブがいたような気がするけど十一期までのカードプールが勿体無さすぎる。思い入れのあるカードを使いたいのは良いけどそれに相性の良いカードを探さないデュエリストが多い。それに小学生以下と中学生以上で区分けされてるのが気に入らねえ。

「仕方ないとはいえ、これじゃあ満足出来ねえぜ」

「ごめんなさい、私がルールを知っていたら勝ちゃんとデュエル出来たのに」

「これから覚えていくんだろ？　なら十分だぜ。それより、俺のデュエルでルールは覚えられたか？」

「えっと……その……」

「いいんだよ。ＯＣＧ次元（おれたち）のデュエルは大雑把に覚えても把握しきれないから。でもこれじゃあ消化不良だな」

「なら私とデュエルしないか？」

声のした方へ振り向くと、そこには眼鏡をかけた男性がいた。高そうな背広とＧＸモデルのデュエルディスクがアニメで登場したプロを思わせる。

「あなたは？」

「私を知らないデュエリストとは珍しいね。私はプロデュエリストの〝方丈（ほうじょう）　英山（えいざん）〟。君のデュエルを見て思うところがあってね」

まさかのプロデュエリストの目に留まるとは。周りに人が集まってるのを見るに、相当有名らしい。

「そんなプロが俺のデュエルに興味を持ったのは良いけど、いったい何が気に入ったんです？」

「気に入ったんじゃない。単刀直入に聞くが君はデュエリストとして自覚があるのか？」

「は？」

唐突に俺は見ず知らずの人にディスられたのか？　ワンキルかましたりオーバーキルしたりしたけどその程度で何か言われる程か？　プロも大型で相手を倒したりオーバーキルならやってるだろうに。

「デッキをそんなに持ってどうするんだ？　プロは一つのデッキを信じてデュエルす

る。複数のデッキを使うなんてナンセンスだ」
「そ、そんな事」
「そんな事あなたには関係無い。それにデッキを複数持つのはプロにもいる。Ｊがいい例でしょうに」
「彼は邪道だ。今でこそトップでいるが、それも一時的なもの。いずれカードに裏切られる事だろうさ」
「盛者必衰。どんなに強く、栄華を誇る者でもいつかは廃れる。当たり前の事をそんなに自信満々に言えるってある意味才能ですね」
「……何故そんなに持たなければいけない？　それではいつかデッキに嫌われる。デッキを一つに絞るんだ」
「断る」
「なら私とデュエルするんだ。それで私が勝ったら君は一つのデッキを選んでそれ以外を崩しなさい」
なんでそこでデュエルを挟むのか分からないけど話がはやいし一度プロとデュエルしたかった。ある意味では丁度いいな。
「分かりましたよ。では」
「デュエル!!」

睦月勝俊
ＶＳ
方丈英山
ＬＰ８０００
「先攻は譲るよ」
「なら遠慮なく。俺は魔法カード〝アラメシアの儀〟を発動。自分フィールドに〝勇者トークン〟が存在しない場合、勇者トークンを特殊召喚」
勇者トークン　☆４　光
ＡＴＫ２０００／ＤＥＦ２０００
「そして魔法・罠ゾーンに表側表示で置く。運命の旅路の効果発動。デッキから〝勇者トークン〟が記されたモンスター〝流離のグリフォンライダー〟を手札に加え、手札一枚を墓地へ送る。〝シャドール・リザード〟を墓地へ送り、その効果を発動。デッキから〝シャドール〟モンスターを墓地へ送る。〝シャドール・ヘッジホッグ〟を墓地へ送り、ヘッジホッグの効果を発動。デッキから〝シャドール〟モンスターを手札に加える。〝影霊の翼（リー・シャドール）　ウェンディ〟を手札へ。流離のグリフォンライダーは自分フィールドに勇者トークンが存在すればメインフェイズに発動。自身を特殊召喚出来る。そして運命

の旅路の第二の効果。特殊召喚に成功した場合、デッキから〝勇者トークン〟が記された装備魔法〝騎竜ドラコバック〟を勇者トークンに装備する」

ソリティア上等の展開はあの町にいた時も一人でやってると酷評だったが、勝たなければいけないデュエルでそんな悠長な事言ってられない。先攻制圧をかます。

「魔法カード〝影依融合（シャドール・フュージョン）〟を発動。手札のウェンディと闇属性の〝シャドール・ビースト〟を融合。〝エルシャドール・ミドラーシュ〟を融合召喚。ウェンディとビーストの効果を発動。ビーストから解決。デッキから1枚ドロー。ウェンディの効果でデッキから〝シャドール〟モンスターシャドール・ヘッジホッグを裏守備で特殊召喚する。カードを2枚伏せてターンエンド」

理想的な流れにまで持っていく事が出来た。プロの戦術といってもアドバンス召喚の為の小型モンスターを並べるのに特殊召喚を多用する。エクストラデッキをそこまで使わないからこれだけやっていれば取り敢えず止まる。

「まさかこれ程とは……私のターン、私は「スタンバイフェイズに何か処理は？」スタンバイフェイズ？　無いが」

「なら俺は伏せているカードを発動する」

「このタイミングで伏せカード（リバース）だと？」

「〝生け贄封じの仮面〟を発動。これでお互いにいかなる場合にもリリースが出来な

くなる。アドバンス召喚は勿論、特殊召喚の為にコストでリリースするのも出来ない」
「な、なんてカードを使うんだ！」
「禁止になっていないから問題無い。それで、何かありますか？」
「くっ……だが、リリースを介さないものは問題無く出来る。相手フィールドにのみモンスターが存在する事で〝カイザー・シースネーク〟を特殊召喚出来る。攻撃表示で特殊召喚だ。特殊召喚したカイザー・シースネークは攻撃力が０になり、レベルも４に下がるが、問題無い。私は〝カオスエンドマスター〟を召喚だ」
サイドラ効果とチューナーモンスターでシンクロを狙う戦略か。でもあの様子だとミドラーシュの効果を知らないのか？　まあ楽しい事になりそうだから黙ってよ。しようと思えばデュエルディスクで確認できるししないのが悪いね。
「君は私を知らないようだから私の戦略を教えてあげよう。私の戦術は一見すれば攻撃力の低いモンスターばかりだが、私の本質はそこではない。君も融合召喚を使うように私もエクストラデッキを使うんだよ」
声高に喋っているが、エクストラデッキの枚数を確認すれば何かしら使うんだろうなとは普通考える。俺の表情が変わらないのが面白くないといったように顔を歪める。
「その歪んだ根性を叩き直してあげるよ。私はレベル４となったカイザー・シースネークにレベル３のカオスエンドマスターをチューニング！」

カオスエンドマスターが両手を胸の前に構え、シンクロ召喚時のサークルを出現させようとする。

「まあ出来ないんですけどね初見さん」

「何？」

怪訝な顔をする方丈さんを尻目に、ミドラーシュの杖が光る。その光がカオスエンドマスターに当たり、カオスエンドマスターは呻き声をあげて膝をついた。

「なんだ……何が起きている？」

「ミドラーシュの永続効果、このカードが存在する限りお互いに特殊召喚は1ターンに1度しか特殊召喚出来ない」

「そ……そんな馬鹿な事が……」

「まだあなたのターンですよ。何かやる事はあるんですか？」

「わ、私はカードを一枚伏せてターンエンド」

プロというからどれ程なのか気になってたけど、正直言って期待外れもいいところだ。はやく終わらせて秋奈にルール教えた方がいいか。

「俺のターン、勇者トークンに装備されてるドラコバックの効果でカオスエンドマスターを手札に戻す。シャドール・ビーストを反転召喚。リバース効果で2枚ドローして手札を1枚捨てる。捨てたのは〝影依の原核（シャドールーツ）〟。効果で墓地へ送られた場合、俺の墓地の〝シャドール〟魔法・罠カードである影依融合を手札に加える。そして発動。手札の〝エフェクト・ヴェーラー〟と〝シャドール・ドラゴン〟を融合。〝エルシャドール・ネフィリム〟を融合召喚」

「そんな……プロの私が……」

「エルシャドール・ネフィリムとシャドール・ドラゴンの効果をそれぞれ発動。シャドール・ドラゴンから解決。効果で墓地へ送られた場合、相手フィールドの魔法・罠カードを1枚破壊する。最後の砦だって許さない」

破壊したカードは〝次元幽閉〟か。意外と危ないの伏せてたな。

「そしてネフィリムの効果でデッキから〝シャドール〟カード1枚を墓地へ送る。〝神の写し身との接触（エルシャドール・フュージョン）〟を墓地へ送る。さて、バトルフェイズといこうか」

既に向こうは意気消沈してるが、そんなのは関係無い。しっかりバトルをして決着を付ける。

「まずはグリフォンライダーでカイザー・シースネークを攻撃」

方丈英山

ＬＰ８０００→６０００
「ビーストでダイレクトアタック」
ＬＰ６０００→３８００
「ツ！相手のコントロールするカードでダメージを受けた時、〝冥府の使者ゴーズ〟を手札から特殊召喚出来る！」
「悪いがそれは通さない。カウンター罠〝神の通告〟を発動。モンスター効果が発動した時、ライフ１５００をコストにそいつを無効にして破壊する」
睦月勝俊
ＬＰ８０００→６５００
「そ、そんなカードまで……！」
「バトルフェイズ続行。ミドラーシュでダイレクトアタック」
ＬＰ３８００→１６００
「ラストだ。勇者トークンでダイレクトアタック」
「こ、この私がああああああ!!!」
ＬＰ１６００→０

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「あの人、もうプロとしてはやっていけないかもね」
「そうだな。でも自分の意見を通すには自分が潰される覚悟もしなきゃいけない。高い授業料だったけど、勉強になったな」
「それがこれから入るはずのプロのお金全部って高いどころの話じゃないんじゃ……」
あの後方丈さんは何も言わずに俺達の前から逃げるように消えた。あそこまで一方的だと申し訳なくならなくもないけど、結局のところテキスト確認しなかったのが悪いから俺は悪くない。今は秋奈にデュエルのルールを教えている。とはいってもエクシーズが出る前くらいのルールは俺経由で覚えてたから、それを元に今のルールとの違いを教える形になってる。
「でもこうやってみるとルールが大きく変わってるよね。覚えきれる自信無いや……」
「大丈夫だ。俺も細かい裁定とか知らない」
「それはそれでどうなの？」
その時々で確認するけど長く覚えてはいられない。それ程までにカード枚数一万種類は伊達じゃないのだ。
「もう少しでフェスも終わりだね」

「そうだな。次会えるのはいつになるのか」
陽菜が秋奈に転生したのは俺が秋奈に出会う事が確定していたからだが、これからも一緒とは言っていない。今俺と父さんが住んでるマンションの近くにいる可能性は限りなくゼロに近いだろう。一緒にいられるようになるのはどれだけ頑張っても数年は先になる。
「でも、大丈夫だと思う。そんな気がするの」
「曖昧だな……でも、そうだといいな」
互いの家が近くにあると願いながら、秋奈の勉強を続けていく。開封も良いけど、今は秋奈ともっと話したい。

# 兄は下の者を舐めがち

デュエルフェスも終わりを告げ、俺と秋奈は互いの親の迎えを待つために会場の入り口前にあるベンチで座っていた。主に秋奈の住んでいる場所がどのような場所であるかを聞いた。そして家族、主に兄弟の事を。

「という事は秋奈にも兄がいるのか」

「うん、今日も一緒に来てたんだけど……どこかに行ったまま最後まで見つからなくて」

兄っていうのは弟や妹を何だと思ってるんだか。なんか秋奈の兄は女癖が悪い気がする。

「それは災難だった……な……」

「ん？　どうしたの勝ちゃ……ん……」

俺が見ている方向に秋奈も振り返る。そこにいたのは俺の父さんともう一人は……誰だ？

「いやー助かりましたよ石木さん、何分こちらの土地勘は欠片も無いもので……石木さんがいなかったら道に迷っていたと思います」

「いえいえ、新しい同僚のよしみですから。それに子供がデュエリスト同士でフェスに参加してるんですから睦月さんのお子さんならうちの子も仲良く出来ると思いますよ」

凄く仲良さげに歩いてる。石木って呼んでたし秋奈の父親ってところか。秋奈も鳩が豆鉄砲を食ったような顔してるし間違いない。

「おお勝俊！迎えに来たぞ」

「それはいいけどその人は誰？　凄く仲良さげだけど」

「ああこの人は父さんの同僚の〝石木　透真〟さんだよ。ここに来るまでに道に迷いかけた父さんを助けてくれたんだ」

「何やってんだよ父さん……」

元の世界でも地図を読めなかったから何となく察してたけど、それが転じて秋奈の父さんと知り合ったのは良いのか悪いのか……秋奈も透真さんに問い詰めてるし、予想外だったんだろう。

「でも秋奈に友達が出来たのは嬉しいよ。無理を通して竜也に付き添いを任せてた甲斐があった」

「その兄さんは来て早々私を置いて何処かに行ったけどね」

「なんだって!?」

「何なら秋奈が高校生からカツアゲされそうになってたから俺も知り合えたんですよね」
「カツアゲ!?」
「どういう事だ勝俊、そんな話聞いて無いぞ！」
「そりゃ今言ったし言えるタイミング無かったじゃん」
それよか父さん達が知り合ってた事にこっちは驚きなんだよ。
「全く竜也め……すまない勝俊君。娘を助けてくれて」
「大丈夫ですよ。デュエルで揉め事を解決出来るんなら俺が出るのが手っ取り早いし、俺自身があの高校生に対してカチンときたんで」
透真さんは頭を深々と下げ、俺に謝るけど俺は全く気にしていない。寧ろ秋奈と出会えた切っ掛けになったからあれはあれで良かったとすら思える。
「それで、今竜也は何処に？」
「それが……何処にいるのか……」
「またぶらついているのか……フェスも終わったというのに困った奴だ」
「その竜也って人、なんで妹の秋奈を置いて何処かに行ったんですか？」
なんとなく理由というか答えは察してるけど取り敢えず聞いてみる。すると透真さんは苦笑いしながら答えてくれた。

「竜也は……根は良い子なんだけどね。女の子と遊ぶのが好きというか、それ優先というか……」
段々と歯切れ悪くなるが、要するに女の子優先で同じ女の子である秋奈をほったらかしているという事だ。見つけたらデュエルで潰さないと……
「でもフェスも終わるって言うのにいったい何処に……ん？」
「お父さんどうし……あぁ……」
透真さんが何かを見つけた事を察した秋奈もその視線の先へ目を向けると、小さく嘆息する。その先にいたのは

「いやぁ今日はとてもいい日だったよ。皆ありがとう」
「えーたっちゃん行っちゃうのいやーもっと一緒にいてよー」
「僕もそうしたいんだけどね、愚妹がいないと親がうるさいんだ。今日はあくまでもアレの付き添いだからね」
「そんな妹ほっといていいじゃーん。別にいてもいなくても変わらないんだからさー」
「ほんとそれな。たっちゃんの邪魔しかしないとかクソじゃん」

「本当なら僕一人で来ても良かったんだけどね。アレがフェスに当選したものだから仕方なかったんだ」
「ふーん運だけはいいんだ」
「てかたっちゃん送り届けたならさっさと帰れよw」

なんだあれは……あそこまで頭の悪い会話をあんな大音量で垂れ流すとはたまげたなぁ……
「秋奈、もしかしてあれが」
「はい……お兄さんです……」
秋奈が羞恥に顔を赤くしてる。〝地霊使いアウス〟の容姿だからか殊更に可愛い。目を逸らすなもっと見せろ。
そんな役得を体感していたいがそうもいかない。件の兄がこちらに気付き向かって来た。得意げな笑みを浮かべて近づいてきて俺の目の前に立つ。

……え？

「君、さっきプロデュエリストの方丈英山を倒してた子だよね？　名前は……分からないや！」
「まあ自己紹介もしてないし、睦月勝俊だ」
「タメ口なんて態度がなってないが、まあいい。僕はプロの卵〝石木竜也〟。人呼んで〝栄光の道を歩く男〟!!」
……すっごい見てて恥ずかしくなるようなポーズをとってキメ台詞らしい二つ名を名乗ってるけど妹の秋奈は頭を抱えながら首を横に振ってる。呆けている俺を馬鹿にするように竜也が続ける。
「君がプロを倒したのは実際驚いたよ。まあ僕ならもっと余裕で勝てただろうけどね。何せ僕はプロを輩出し続けているデュエル塾〝流星塾〟の塾生なんだから」
「流星塾？」
アークファイブのような要素が突然出てきたけど、この世界の俺の記憶を含めてそんなもの知らない。知っているだろう秋奈が口を開いた。
「デュエルを教える塾だよ。基本ルールとか塾特有の戦術を教えるのが特徴だね。私は入っていないけど」
「流星塾は高い倍率を誇る有名塾。弱小デュエリストには入る資格すら無いのは当然だ！」

妹の秋奈を当然の権利のように貶すのは絶対的な自信か、はたまた虚勢か、その答えを知るには

「ならデュエルといこうぜ。あんたの実力が本物か知りたくなった」

「プロに勝った程度で調子に乗るな。君程度が僕に適うはずが無いだろう」

「まあ受けないならそれでもいいさ。あんたの評価が知れるからな」

「何だと?」

「デュエリストがデュエルを受けない理由は三つ。

一つ、そのタイミングでデッキを持っていない。又はデッキと呼べる代物がない。

二つ、デュエル出来る状態じゃない。風邪とか事故後とかな。

三つ、デュエルしても自分が負ける未来が見えるからしたくない。

こんなところだな。もし三つ目だとしたらあんたは臆病者の負け犬だが、今の状態を見るとそうとしか思えないな」

「このガキ……!」

竜也はこめかみに青筋を立てて俺を睨みつける。それを気にせず俺は続ける。

「一つ目のデッキの未所持だが、こんなイベントにデッキを持たずに来るアホはいない。二つ目は健康状態を参照するが、あんたは見る限り健康そのもの。そもそも風邪ひいてたり病気抱えているのにイベントに参加するなんてヤツはいない。よって二つ目

も無い。よって消去法で三つ目だ。しかし恥ずかしくないんだな。デュエリストが聞いて呆れる」

プロを倒したという箔もついた俺の実力は彼にとって未知数に映る。あの時使ったデッキの別展開でも予想しているんだろうか。少し考えるそぶりを見せると口元を歪ませた。

「いいだろう。デュエルを受けよう。ライフはそっちに合わせて４０００でやるかい？」

「そっちに合わせて構わない。もう何回もやってるし、今更だ」

「ふふっ……じゃあ見せてあげよう。僕の実力を！」

「「デュエル!!」」

睦月勝俊

ＶＳ

石木竜也

ＬＰ８０００

「僕の先攻、僕は〝ブレイドナイト〟を召喚。カードを3枚伏せてターンエンド。ブレイド・ナイトは手札が一枚以下の場合、攻撃力が４００ポイント上がって攻撃力は今

２０００だよ」

「随分静かな立ち上がりだな。俺のターン、ドロー。早速で悪いがあんたのプランを全壊させてもらうぜ」

「？」

「手札から魔法カード〝ハーピィの羽箒〟を発動！相手の魔法・罠カードを全て破壊する」

「何!?」

俺の発動した羽箒が竜也の伏せカードを葬り去る。しかし流石に竜也もされるがままでは無かった。

「伏せカード（リバース）〝スケープ・ゴート〟発動！羊トークン４体を特殊召喚！」

伏せられていたスケープ・ゴートで竜也の残ったモンスターゾーンを羊トークンが埋める。しかし他のカード〝攻撃の無力化〟と〝ＤＮＡ改造手術〟が破壊された。

「これで不安要素は消えた。お前を倒すプランは完成しつつあるぜ。俺は魔法カード〝コール・リゾネーター〟を発動。デッキから〝リゾネーター〟モンスター〝クリムゾン・リゾネーター〟を手札に加え特殊召喚。こいつは自分フィールドにモンスターが存在しなければ特殊召喚出来るモンスターだ。更に魔法カード〝コマンド・リゾネーター〟を発動。手札の〝リゾネーター〟である〝クリエイト・リゾネーター〟を捨てて、

デッキからレベル４以下の悪魔族モンスター〝風来王　ワイルド・ワインド〟を手札に加え特殊召喚だ。こいつは自分フィールドにチューナーモンスターが存在すれば特殊召喚出来る。

レベル４の風来王　ワイルド・ワインドにレベル２のチューナーモンスタークリムゾン・リゾネーターをチューニング。シンクロ召喚〝レッド・ライジング・ドラゴン〟」

俺の召喚したシンクロモンスターに周囲が気圧されたように騒然とする。これでもまだ展開途中なんだけど。

「ふ、ふふふ……確かにシンクロ召喚まで出来るとは予想外だった。しかしその攻撃力ならまだ倒すのは容易だよ！」

「何勘違いしてるんだ？」

「？」

「まだ俺のメインフェイズは終了してないぜ！レッド・ライジング・ドラゴンの効果発動。シンクロ召喚に成功した時、自分の墓地の〝リゾネーター〟１体を対象に特殊召喚出来る。この効果を発動するターン、俺はシンクロ召喚以外でエクストラデッキから特殊召喚出来なくなるけどな。クリムゾン・リゾネーターを特殊召喚。クリムゾン・リゾネーターの効果発動。俺のフィールドに存在するモンスターがこのカードと闇属性・ドラゴン族・シンクロモンスターのみの場合発動。手札・デッキから同名以外の〝リゾ

ネーター〟を2体まで特殊召喚する。〝シンクローン・リゾネーター〟とクリエイト・リゾネーターを特殊召喚。

レベル6レッド・ライジング・ドラゴンにレベル2のチューナーモンスタークリムゾン・リゾネーターをチューニング。シンクロ召喚〝レッド・デーモンズ・ドラゴン〟」

「攻撃力……3000……?」

「この程度で諦めんなよ。あと一回シンクロ召喚やるんだから。俺はレベル8シンクロモンスターレッド・デーモンズ・ドラゴンにレベル1チューナーモンスターシンクローン・リゾネーターとレベル3チューナーモンスタークリエイト・リゾネーターをダブルチューニング!!」

「シンクロ召喚で……チューナーモンスターを2体使うだって!?」

「いでよ〝スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン〟!!」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　☆12　闇

ＡＴＫ３５００／ＤＥＦ３０００

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンに視線が集まり、場はフェス同様の騒ぎをみせる。ギャラリーも増えてきた。

「シンクローン・リゾネーターがシンクロ召喚の素材となって墓地へ送られた場合、墓地の〝リゾネーター〟であるクリエイト・リゾネーターを手札に加える。そしてバトル

フェイズだ。スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの攻撃力は墓地のチューナーモンスター1体につき500ポイントアップする。つまり攻撃力は」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン

ＡＴＫ３５００→５０００

「攻撃力……５０００……！」

「スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンでブレイド・ナイトを攻撃。バーニングソウル!!」

石木竜也

ＬＰ８０００→５０００

「ぐぅおおおおおおお!!!」

「カードを一枚伏せてターンエンド。さあ、あんたの実力見せてくれ」

とはいっても竜也の手札は一枚、フィールドは羊トークンのみ、壊獣あったら泣くけどあのデッキはアニメで観た事ある。

恐らくは羊トークンを使って〝Ｆ・Ｇ・Ｄ〟（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）を召喚する気だったんだろう。初代のＫＣトーナメント編でデュエルロボが使ってたのを覚えてる。流石にサブギミックとして何か入ってるだろうけど攻撃力で言えばスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンを超える事は出来ない。

「僕の……ターン！……くそっ」

どうやら目当てのカードは来なかったようだ。次の俺のターンで終わりらしい。
「この程度でイキってたのか。とんだ拍子抜けだな」
「なん……だと……？」
「あんたの実力がこの程度なら流星塾というのも大した事ないんだな。そこで教えてるのは相手への煽り方とイキり方だけか？」
「……るな」
「ん？　なんだって？」
「ふざけるな！僕の先生を馬鹿にする事は許さん！」
どうやら逆鱗だったようだな。でも
「ねじ伏せられるのは強者のみ。さあかかって来い！」
「言われなくてもやってやるさ！僕は魔法カード〝手札抹殺〟を発動。お互いに手札を捨て、捨てた枚数のカードをドローする」
「流石に一矢報いろうとはするよな。俺は1枚捨てて1枚ドロー」
「僕も同じく1枚捨ててドロー。そして捨てられたカードは〝ライト・サーペント〟。このカードは手札から墓地へ送られた場合、墓地から特殊召喚出来る。そして来い僕を導くサーキット!!」
竜也がライト・サーペントを出した場所はメインモンスターゾーンの真ん中。やっと

エクストラデッキをまともに使うデュエリストが現れたか。
「アローヘッド確認!召喚条件は【モンスター3体】、羊トークン3体をリンクマーカーにセット!サーキットコンバイン!!　リンク召喚〝パワーコード・トーカー〟!!」
パワーコード・トーカー　ＬＮＫ３　炎
ＡＴＫ２３００
「パワーコード・トーカーの効果発動!フィールドのモ表側表示スターを対象にその効果をこのターン無効にする!」
「これでスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの攻撃力が３５００に戻るという訳だな」
「そうだ。そしてパワーコード・トーカーはダメージ計算時、自身のリンク先のモンスターをリリースして元々の攻撃力の倍に出来る。これで「それはどうかな?」な、何?」
「伏せ(リバース)カードオープン〝スカーレッド・レイン〟。自分フィールドのレベル８以上のモンスターが存在する場合、レベルの一番高いモンスター以外のモンスターを全て除外する」
「レベルの一番高いモンスター以外……でもそれならパワーコードは」
「参照するのはレベルの一番高いモンスターだけ。それ以外は参照しない。リンクモンスターも除外される」
「な……!」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの咆哮が轟く。高まったエネルギーが形をつくり、竜也のフィールドを蹂躙する流星群を化す。ライト・サーペントと羊トークンはなす術なく破壊され、パワーコード・トーカーはいくつか躱す事が出来たが、それでも降り注ぐ破壊の雨からは逃れられなかった。

「そ、そんな……僕のモンスターが……全滅……？」

「そして除外されなかったモンスターはこのターン終了時まで自身以外のカード効果を受けない。スカーレッド・ノヴァを効果で除去しようとしても無駄だ」

尚、リリースは死ぬ。

「ぼ、僕はこれでターンエンド」

「ライト・サーペントは手札入れ替えの際に活用出来ると踏んだ故か？　もう少し練り直せるデッキだな。まあそれは俺の考える事じゃないか。俺のターン、このままバトル。スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンでダイレクトアタック!!」

ＬＰ５０００→０

「ぐぅ……あああああああああああ!!」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇

他のデュエリストより伸びしろはあると感じたが、今一つ足りないな。そこは時間が解決するとは思うが、それはこいつ自身の問題だしいいか。

「そんな……僕が……何も出来ずに負けるなんて……」
「なーんだ。こんなガキに負けるとか、大したことないじゃん」
「ほんとほんと、散々イキってた割にこの程度かよって感じw」
「じゃああんたらもやるか？」
「「え？」」
竜也を馬鹿にするように笑っていた取り巻きの女性達へ俺はデュエルディスクを構える。馬鹿にするって事はそれだけの力量があるって事だもんな？
「タッグで構わないぜ？　お前達にどれだけの実力があるのか、これで確かめてやる。さあどうした？　デュエルディスクを構えろよ」
「え、いや……」
「わ、私達は……デュエルは見る専っていうか、デッキはあるけど」
「なら出来るな。さあデュエルだ」
「「え、えええ……」」
恐らく今の俺は小学生には似つかわしくないデュエリスト特有の顔芸でもしてるんだろう。皆の俺を見る目が闇マリクを見る遊戯達のそれだわ。
「こら、勝ちゃん。皆怖がっちゃってるよ。勝ちゃんのデュエル見て勝ちゃんとデュエルしたいなんていう人いると思う？」

「秋奈……だが俺はあいつらとデュエルしないといけない。デュエルで人を馬鹿にするなら、潰される覚悟を持ってるはずだろ」
「そんなに覚悟キマッてる人そういないよ。皆さん、勝ちゃんとデュエルしないのなら早いところ帰った方がいいと思います。勝ちゃん、このままにしとくと無理やりにでもデュエルしようとしかねませんから」
失礼な。ちゃんと話し合い（デュエル）で決着つけるさ。
「デュエルを話し合いって言わないの」
心を読まれた……だと……！
「っ……ふん！」
「そんなヤツ知らねーしバーカバーカ！」
三下のような捨て台詞を吐くと取り巻き達は走り去っていった。ギャラリーも散り、俺達だけになる。
「……笑え、笑えよ。僕は君を馬鹿にしていたというのに、このザマだ」
意気消沈した竜也は俯いて自嘲する。そんな竜也に透真さんが近寄る。
「竜也、今日は秋奈の付き添いという事でフェスの参加を許可したはずだ」
「……」
「遊び歩くのはいい。でもお前にはお前のやる事が、秋奈を守るという役目があった。

お前がそれを守らなかったから秋奈は高校生に傷つけられたんだそうだ」
「っ！あ、秋奈が……！」
「そうだ。それを助けてくれたのがそこの睦月さんの息子さんだ。お前の尻拭いをしてくれた相手に対してお前の態度は決して褒められたものではない」
「……」
竜也は何も答えない。それを見越していたのか透真さんは視線を俺に向け、竜也が何か言いかけたのを頑として聞かない姿勢を見せる。
「勝俊君、虫のいい話とは思うが今日の事は許してもらえないだろうか。秋奈については私達の家の問題で、竜也の事も私達が甘やかした結果だ。これから正していく。それをもって許していただきたい」
透真さんが持ち掛けた話は確かに虫のいい話だった。でも
「いいですよ。彼がほったらかしにしたから秋奈と会えたんだし、悪いだけじゃなかった」
秋奈と会わなかったら彼女が陽菜の転生体とも知らなかったし、それも竜也の身勝手な行動がもたらしたものだ。
「勝俊君……ありがとう」
「……」

竜也は何も言わないが、まあいいだろう。
「今日はもう帰りましょう。最後に連絡先だけもらえますか？」
「勿論。これだよ」
透真さんから自宅の電話番号を、秋奈からはメールアドレスを教えてもらった。
「ありがとうございます。秋奈、なにかあったら連絡するよ」
「うん、ありがとうね」
「よーし、それじゃあ帰るか」
父さんの一声で皆歩き始めた。でもこの後秋奈といられないと考えると少し寂しいかな……
「あ、そういえば勝俊」
「どうしたの？」
「石木さんの家はうちの近くだからいつでも会いに行けるぞ」
「マジで？」
前言撤回。楽しくなりそうだ。

# 新生活と新しい約束

秋奈達と帰った後、残っていたパックを剥いて新しいデッキの構成を考えていると、父さんが部屋に入って来た。

「勝俊、もうすぐ学校が始まるけど大丈夫そうか？　学校行けそうか？」

「父さん、大丈夫だよ。前みたいな事は無いようにするから」

「あ、ああ……でも親としてはやっぱりな。心配なんだよ」

父さんも何だかんだ言って後ろめたく思ってるんだと心境を吐露する。仕事で家族との時間をとれない父さんを前の世界では家族に関心が無いのだと思ってた。だけどそれは勘違いだったらしい。

「ありがとうね。でも心配しないでいいさ。今度は俺にも味方がいる。秋奈も、このデッキ達も」

「そういえば、いつの間にそんなにデッキを作ったんだ？　前まではバスター・ブレイダーの戦士族デッキだったのに」

「え？　あ、あぁ……あのデッキは全部破り捨てられちゃったから。新しいデッキを考えてたら色々とね」

「そうか。でもそんなにあると使い方を間違えないか？」
「そうならないように時々構成を確認するんだ。それにテキストを確認すれば大概のデッキは分かるし」
「す、すごいな……お前も、デュエリストだって事なんだな」
そう言うと父さんは遠い目をしながら窓の外を見る。こんなシーンが本当にあるとは思わなかった」
「父さんも昔はプロを目指して、母さんも応援してくれていたんだ。セミプロでもいいところまでいったんだ。でも、あと一歩届かなかった。そこで躓いちゃったんだなぁ。母さんと結婚しても、母さんは父さんに昔の姿を求めてる。そしてそれは大和にも。勝俊に求めなかった理由は分からないが、大切にしていない訳じゃないと分かってあげてくれ」
「父さん……」
父さんにもそんな過去があったのか。そして母さんは父さんのｉｆを兄貴に求めてる。だから兄貴に甘いし、俺よりも兄貴に期待する。一人いればいいから俺の優先度は低い。好きに生きられると喜ぶべきか、興味を持たれていないと落ち込むべきか。
いや、俺はこの世界の俺じゃない。好きに生きる為に禍根を絶った。なら後は俺の道だ。

「俺は父さんのデュエルを知らない。だから俺は父さんの望むデュエリストにはなれない。だけど夢の続きは見せられる」
「勝俊……」
「だから父さんは俺を、俺の行く先を見ていてくれ。そしてその結末も。どんなに最悪な終わりでも、俺は受け入れる」
「勝俊……あぁ、あぁ……」
俺の部屋ですすり泣く声が響く。でも何も悲しい事は無い。俺の人生は俺のもので、それはきっと輝かしいものになるから。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「じゃあ父さん、行ってくるよ」
「ああ、気を付けてな」
一週間後、今日は引っ越した後に初めて転校した学校に登校する日だ。秋奈と登校先にある町の広場で待ち合わせをしてる。
「おはよう秋奈」
「お、おはよう。勝ちゃん」

この一週間、秋奈を陽菜と言い間違える事が頻発して直すのに苦労した。いや間違ってないけど、前の世界の名前陽菜だし。

「でも良かったの？　わ、私といると皆からよく思われないと思うよ？」

「そんなの前の世界でも少なからずあったろ？　今更気にする事も無いさ。ほら、案内頼むぜ」

「う、うん」

秋奈は不安げにしているが、この世界はデュエルで解決できる。なら何も問題ない。転生者が集まるとなったら少し話が変わるが、転生者のよしみという事で話し合いで解決出来るだろう。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「今日は転校生が来ている。皆仲良くするように。では入ってきてください」

「睦月勝俊です。腕はそこまでですがデュエル大好きです。よろしくお願いします」

「「よろしくお願いしまーす！」」

担任の合図で教室に入った俺は転校生の挨拶を済ませ、空いている席である秋奈の隣の席へ座る。クラスメイトが質問しようとするが、担任が止めていた。

「質問はあるだろうが後にしろー。一時間目からデュエルの授業なんだから体育館に急げー以上」

担任は放任主義と言わんばかりに淡々と言い捨てて教室を出ていった。すると堰を切ったようにクラスメイトが俺に詰め寄る。

「なあなあデュエルするんだろ？　どんなデッキ使うんだ！」

「後でデュエルしようぜ！俺結構強いんだ！」

「どんなカードが好きなの？　私は可愛いカードが好きなんだ！」

皆口々に自分の言いたい事をいうが、俺は笑って流している。秋奈は俺を気にせず教室を出ていく。それを笑うやつが何人か見えた。

「睦月君どうしたの？　あっちに何かいた？」

「あぁ、知り合いがな」

「ええ～今出てったのって地味スだろ？　あんなのがいいのかよ～」

「そうだが？」

「「え？」」

「今はいいだろ。早く体育館行こうぜ。案内してくれよ」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇

デュエルの授業はあの担任ではなく、親し気な女教師だった。

「皆さーん、これからデュエルの時間です。ペアをつくってデュエルを始めてくださーい。分からない事があったら先生に聞いてねー！」

先生の声を皮切りにクラスメイトが俺に集まってきた。秋奈は相変わらず寄って来ない。そんな中に一人恰幅の良い少年が多少乱暴に割り込んでくる。

「おい、俺が相手してやるよ」

「さ、猿山君！」

「猿山？」

「転校生、お前あんな地味スが好きなんだってな。だっせぇ！俺がその根性叩き直してやるよ！」

どうやら秋奈が知り合いというのが気に入らないらしい。地味スってのはアウスに似てる地味子って事だろうな。貶すようなニックネームを当然の如く付けているのがやはり小学生らしい。

「お前に俺の嗜好をどうこう言われたくないな。それに根性の意味わかってて使ってるのか？」

「うるせぇ！俺がこの学校のルールを教えてやるよ！」

……まぁいいか。元々全員とデュエルするつもりだし、多分一番強いんだろう。

「『デュエル！』」

睦月勝俊
ＶＳ
猿山達之
ＬＰ４０００

「先攻は俺だな。俺は手札の〝氷結界の虎将（こしょう）グルナード〟を捨てて魔法カード〝ワン・フォー・ワン〟を発動。これにより手札・デッキからレベル１のモンスターを特殊召喚出来る。デッキから〝氷結界の霜精（そうせい）〟を特殊召喚」

「おっとそいつにチェーンするぜ。手札の〝増殖するＧ〟を捨てて効果発動！このターン、お前が特殊召喚する度にデッキから１枚ドローするぜ！」

「っ！増Ｇだと……」

まさか手札誘発がこの世界で出てくるとは……皆特に気にしてる様子もない。ここのレベルはかなり高いみたいだな。でも

「なら更にチェーンだ。手札から速攻魔法〝墓穴の指名者〟を発動。相手の墓地のモンスター１体を対象。そいつを除外し、次のターン終了時まで、除外したモンスター及びその同名モンスターの効果を無効にする。増殖するＧを選択するぜ」

「なんだと!?」

「増殖するＧを無効にしただって!?」

「……」

地面から突き出た手が猿山の墓地に存在しているGを指す。すると墓地に異次元の穴が開き、カードを吸い込んでいった。勿論ソリッドビジョンだけどな！

「チェーン処理。霜精を特殊召喚。そして効果発動。デッキからレベル３以下の〝氷結界〟モンスター１体を墓地へ送り、ターン終了時まで同じレベルとなる。デッキから〝氷結界の術者〟を墓地へ。〝氷結界の伝道師〟を召喚」

「あ？　氷結界の伝道師は〝氷結界〟モンスターがいれば特殊召喚出来るだろうが」

「その代わりにこのターン、レベル５以上のモンスターが特殊召喚出来なくなる。そんなデメリット背負うくらいなら召喚権くらいくれてやるさ。伝道師の効果発動。自身をリリースして墓地の〝氷結界〟モンスター、グルナードを特殊召喚」

氷結界の虎将　グルナード　☆８　水

ＡＴＫ２８００／ＤＥＦ１０００

「馬鹿な！１ターンで攻撃力２８００だと?!」

あれ？　実はそんなに強くない？　増Ｇ以外に誘発飛んでこないし、２８００で驚かれてもこっちが困る。誘発撃つような状況じゃないってのもあるけど。

「グルナードの効果によって俺は通常召喚に加えて一度〝氷結界〟モンスターを召喚出来る。もっとも、俺の手札にはモンスターはいないけどな」

「なんだよ。じゃあ意味ねえじゃねーか！」
「俺の手札はコレ。永続魔法〝氷結界の晶壁〟を発動。発動時に自分の墓地のレベル4以下の〝氷結界〟を対象に発動出来る。そのモンスターを特殊召喚する。選択するのは氷結界の術者。守備表示で特殊召喚だ」
「へっ高レベルモンスターを出したはいいけど、それ以外は雑魚の集まりじゃねえか！これなら余裕だぜ！そこまでって言ってたけど全然強くないな！」
「……俺はこれでターンエンド」
まあそこまで強いデッキチョイスして無いし。てか術者の効果把握してるのか？氷結界はどれも永続効果持ちのどっちかっていうとロックメインのデッキだけど……
「俺のターン、ドローだ！俺は手札の獣族モンスター〝グリフォール〟を墓地へ送って〝虚栄の大猿〟を特殊召喚だ！そして墓地のグリフォールを除外して〝岩の精霊タイタン〟を特殊召喚！そして〝バビロン〟を通常召喚！」
バビロン！目玉からビームを発射するバビロンじゃないか！どうしてデッキに！レベル2獣族だってもう少しマシなカードあるだろ！
「聞いて驚くなよ？　お前にチューナーモンスターの使い方を教えてやるぜ！俺はレベル2のバビロンにレベル5、虚栄の大猿をチューニング！
雷迸る暗雲の下で　二角の獣が駆け抜ける　シンクロ召喚！

レベル７〝ボルテック・バイコーン〟!!」
ボルテック・バイコーン　☆７　光
ＡＴＫ２５００／ＤＥＦ２０００
「まさかシンクロ召喚してくるとは……」
「どうだ!・チューナーモンスターとそれ以外のモンスターで召喚する特殊な召喚方法シンクロ召喚!その中でも最強のボルテック・バイコーンだ!」
というより俺はこの世界にも召喚口上があるのがビックリだよ……楽しそうだなおい。
「まだだ!・手札から装備魔法〝一角獣のホーン〟をボルテック・バイコーンに装備!これで攻撃力７００ポイントアップだ!」
「これで３２００……か。グルナードを超えたな」
「その通り!・さあバトルだ!」
「だが氷結界の術者によってレベル４以上のモンスターは攻撃宣言出来ない。残念だったな」
「……え?・」
「更に霜精が存在する限り相手モンスターは攻守が５００ダウンするから今の攻撃力は２７００だ。グルナードを下回る。タイタンも下がって１２００だ」

術者が左手に持つワンドで巨大な結界を張っている。小さいモンスターなら通れる程度だが、高レベルモンスターではどうあがいても攻撃は通らない。更にグルナードの方に乗り霜精が身震いしながら猿山のフィールドに雪を飛ばしている。可愛いなおい。

「さて、何かあるか？」

「くっ……ターンエンド」

「俺のターン、ドロー。さて、面白いものを見せてもらった礼だ。俺もエースを見せよう」

「お前の……エース？」

「相手フィールドにモンスターが存在し、自分フィールドに〝氷結界〟モンスターが存在する場合、〝氷結界の虎将　ウェイン〟は特殊召喚出来る。ウェインは特殊召喚に成功した場合、デッキから〝氷結界〟魔法・罠カードを手札に加える。〝氷結界の紋章〟を手札に加え発動。デッキから〝氷結界〟モンスターを手札に加える。〝氷結界の随身〟を手札に加え通常召喚。これで役者は揃ったぜ！」

「役者？　……まさかお前もシンクロ召喚するのか！」

「まあそう言う事だ。自信満々の解説ご苦労さん。俺はレベル５の氷結界の虎将ウェインとレベル２の氷結界の随身にレベル２の氷結界の術者をチューニング！

氷獄に閉ざされしシヴァの槍　その三つの力を龍に変え　遍く全てを打ち倒せ！

シンクロ召喚!!
降臨せよ〝氷結界の龍　トリシューラ〟!!!」
氷結界の龍　トリシューラ　☆9　水
ＡＴＫ２７００／ＤＥＦ２０００
「と……トリシューラ……」
「多くの大会で暴れまわって、今じゃデッキに1枚しか入れられない伝説のカード……」
そんなに有名ってなら効果も知ってるな。ヨシ！
「トリシューラの効果発動。相手の手札・デッキ・墓地のカードをそれぞれ1枚ずつ除外する。フィールドのボルテック・バイコーンと墓地の岩の精霊タイタン。そして最後の手札を除外する。《トリシューラ・シャクティ》!!」
トリシューラが発した咆哮が猿山のカードを氷漬けにしていく。ダメージフィードバックは微々たるものだが、何故か吹いてる風が冷たい。ここ体育館なのに。何なら真夏なのに。
「ぼ、ボルテック・バイコーンの効果だ！」
「ボルテック・バイコーンの効果は破壊された場合のみ。除外ではデッキ破壊は出来ないぜ」

「なんだと……」
「バトルだ。グルナードでタイタンを攻撃。そしてトリシューラでダイレクトアタック!!」
猿山達之
ＬＰ４０００→２４００→０
「くっぐあああああああああああああ!!」
「まだ、俺が本気を出すには弱い……な」
◇◇◇◇◇◇◇◇◇
あのまま何事も無く学校が終わった俺達は帰路につきながら秋奈の小言をいただいている。デッキパワー低いとはいえやりすぎとの事。いうて向こうもワンターンでシンクロしてたしトントンでは？　トリシュはアカン？　ソンナー
「言い訳しない。あの後皆勝ちゃんにビビッてデュエル出来なかったじゃない」
「俺がやろうぜって言っても震え上がって逃げまどってたからなぁ。ウケる」
「こら」
秋奈は窘めるように言うが、その表情はどこか楽しそうだ。一人でいる事が多いように見えたし友達いないのか。
「……今朝私が言った事覚えてる？」

「あぁ、皆からよく思われないってやつだな」
「私、デュエルの知識はあるけど強くないから、皆から弱いって言われて嫌がらせを受けてたの。女子の皆からも気取ってるって思われてるらしくて……そんなつもり無いのに……」
小学生というか、下手をすれば社会人になってもありそうなネタだ。ありがちだからこそ質が悪い。どこにでもあると取り合わないケースも出てくる。
「なら強ければ何も言われないな。俺も付き合うよ」
「そんな……今日の件で勝ちゃんも何されるか分からないのに……」
「だから今に始まった事じゃないだろ？　デュエルで解決出来るんだから任せとけって。まずはデッキ構成からいくか。ルールはもう大丈夫っぽいし」
特殊裁定はどうしようもないけどなー。と茶化す俺に秋奈は小声で「どうして……」と呟いた。
「どうしてそこまで私に付き合ってくれるの？　私、勝ちゃんに何も出来てないのに、それどころか勝ちゃんが死んじゃったって聞いた時冗談だって思ってたんだよ？　それなのに「やかましい」……」
「言ったはずだぜ。前世の事は許すと、俺も非のある事だったしお互い様ともな。それならこれからは俺がやりたかった事をこの世界に合わせてやるだけだ。秋奈を……

陽菜を幸せにする。俺はもう陽菜から離れない」

「……勝ちゃん」

言ってることかなり恥ずかしいが、秋奈が俺に抱く後ろめたさを消すには俺が受け入れると伝えないといけない。前の世界では気持ちを伝えなかったから離れてしまった。今度は間違えない。離さない。

「俺達は一度過ちを犯した。なら次は上手くいく。そうならない術を少なくとも一つ知ってるんだ」

「勝ちゃん……ダメ……私にそんな資格……」

「資格なんざいらないだろ。自分の本当の姿じゃないから本来の人格に遠慮してるのか？」

「……」

「秋奈、いや陽菜……この世界では確かにお前は石木秋奈だ。しかし同時に園田陽菜でもある。その身体を明け渡した理由は石木秋奈が生きる希望を失ったからだ。彼女の分まで幸せにならなくちゃいけない。まずそこが違う」

「どうして……あの子だって生きたかったはずだよ！でも、デュエルが弱いってだけで苛められて、お前がデュエリストになんてなれるはずが無いって……デュエルって何なの？　デュエルが強いのがそんなに偉いの？」

「それは……」
「嫌い……デュエルなんて大嫌い……勝ちゃんがデュエルしてる所を見てると……勝ちゃんまで嫌いになっちゃう……」
「陽菜……」
「私は……秋奈だよ……」
陽菜の……秋奈の絞り出した一言は、俺の動きを止めるのに十分だった。陽菜として俺と共にいたい自分と秋奈としてデュエルを嫌う自分。それがせめぎ合い、どうにもならないんだろう。
「秋奈、デュエルとは何か。言えるやつはどれだけいると思う?」
「……そんなの、分からないよ」
「答えは簡単だ。デュエルはカードゲーム、皆が楽しむ遊戯(ゲーム)だ。そこに多少の喧嘩はあれど、憎む事も蔑む事も必要ない。デュエルを嫌いになる必要なんてないんだ」
「でも……もう……」
「それでもデュエルを好きになれないならそれでもいい。でも俺を見ていてくれ。いつかきっとデュエルが好きだって言わせて見せる。だからデュエルじゃなくて俺を見ててくれ」
「勝……ちゃん……」

秋奈は涙を滲ませてしゃがみこんだ。俺もしゃがんで秋奈の背中をさする。そう、今度こそハッピーエンドを掴むんだ。

このデュエルモンスターズの世界で。